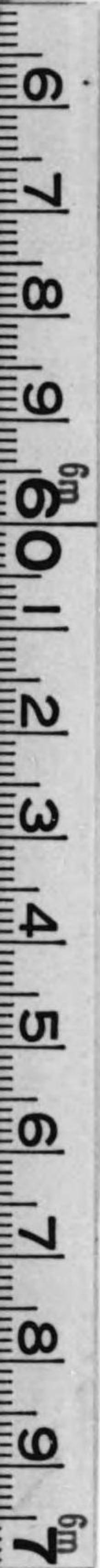
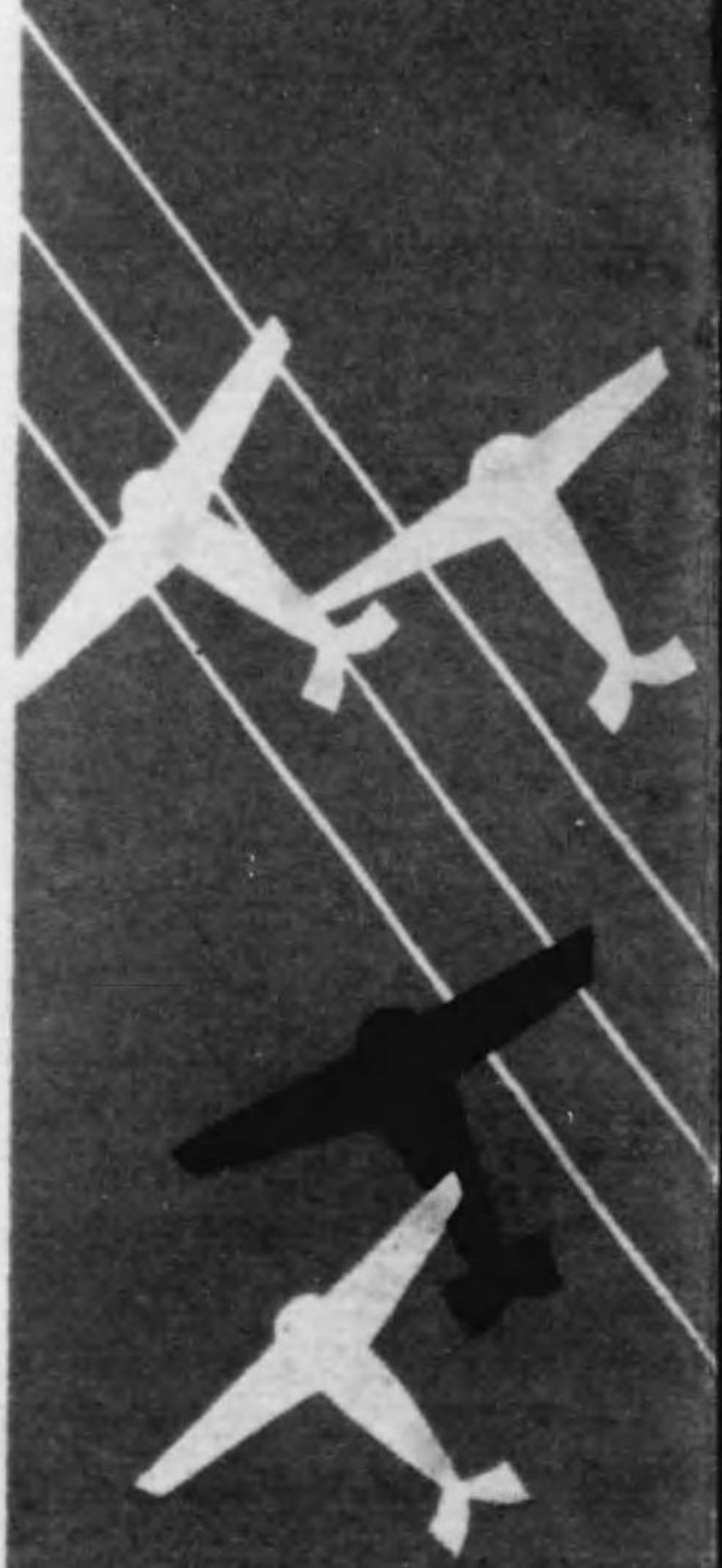


始



特234
28



名古屋市

戦線銃後美談集
第二輯

特234
28



戰線鏡
後美談集
第二輯



忠勇義烈

忠

名古屋市長縣忍



縣會長之書



緒言

曩に、本市教育會が戦線銃後美談集を刊行するや、聖戦下まことに時機に適せる事業なりとして各方面に豫期以上の反響を捲き起し純情に満ち溢れた感激と感謝の辭、心からなる激勵と双手を擧げての後援の辭が机上に山積された。これこそ集録された美談そのものゝ如き麗しく有難き情景の展開である。

以來、益々銃後の強化後援に邁進没頭、その折々に得た數多くの我が郷土に於ける感激に満ちた尊き見聞事項を、此處に再び發表する事が出来るのは本會の洵に欣快とする處である。願れば、武漢攻略以後皇軍の進む處、着實なる作戰の下、戦果大いに擧り、戦線の宏大無比なる正に世界戦史に燦として一新紀元を劃しつゝあるの時、防共の鐵壁愈々固くして容共抗日政權の動搖頓に甚しく、雄々しき新政權の脈々たる胎動と共に東亞の天地に黎明が訪れんとしてゐる。かくて一億一心、將に世紀の創業が完遂せられんとしてゐるのである。

然も此の間、第二次歐洲大戰の勃發を見、複雑錯綜せる國際場裡に立つて、經濟戦思想戦は

熾烈を極め、帝國の負荷は愈々重からんとしてゐる。國歩艱難に皇國當然の姿であり、忍苦試鍊は興亞の聖業を翼讚し奉る國民の光輝ある矜持でもある。「迎年祈世」我等は茲に輝く皇紀二千六百年の新春を迎へ聖壽の萬歳を壽ぎまつるに當り、我等が郷土の以て龜鑑とすべき此の國民的敘事詩を、謹んで護國の英靈に捧げると共に、新春を遠く戦地に迎へられる忠勇なる郷土の將士各位への感謝の贈り物としたい。

請ふ、此の尊き時局教育資料を一般教育關係者は勿論、廣く銃後の護りの第一線に活躍されつゝある各種團體の各位によつて興亞新秩序建設の生きた礎石として活用あらんことを。

終りに臨み第一輯發行以來引き続き御懇切なる御指導を贈つた村瀬收先生、資料の蒐集並に編輯に御盡瘁下さつた委員諸氏の勞を謝し將來の御協力と御健闘とを祈る次第である。

昭和十五年新春

名古屋市教育會

戦線銃後美談集 第二輯

目次

一、夜叉か鬼神か 攻撃精神の権化片桐少尉……………	一	一、内鮮融和の華……………	三
二、梅檀は二葉より馨し……………	五	二、白衣勇士を慰問する少女の赤誠……………	三
三、大別山の散華……………	一五	三、感心な銃後少年の英靈巡拜……………	三
四、戦線の美譽……………	一六	四、聖啞者の身で白衣勇士を慰問……………	三
五、兄の屍を越えて天晴れ仇討……………	一九	五、長期戦下に綴る感激三重奏……………	三
六、非常時日本女性の體……………	三	六、戦線銃後御奉公競べ……………	三
七、最後の御奉公と陸軍病院でお手傳ひ……………	三	七、學童の遺言でその貯金を献金……………	三
八、護りは固し銃後八少年……………	三	八、不幸な五兒を身に代へて養育……………	三
九、銃後強化部隊に在り……………	三	九、銃後の華、髪理髮師……………	三
一〇、バリカン持つ手を紫色に腫らして……………	三	一〇、貯金と廢物報國……………	三
		一一、銃後を護る模範遺家族世話係……………	三
		一二、純真な老漁夫の赤誠……………	三

二二、勇士の家を守る二小店員……………三〇

二四、部隊長感激の軍國三兄妹……………三六

二五、少女の赤心孤獨の勇士を勵ます……………三六

二六、夫を思ふ一念に勉學する勇士の妻……………三七

二七、良縁も顧みず留守宅を護つた一女性……………三七

二八、贈る日章旗に軍國少年の魂宿る……………三七

二九、留守を護る雄々しき妻女……………三七

三〇、硝煙下慰めの新聞……………三七

三一、遺品のフィルム焼付けて……………三七

……… 伴の部下の遺族へ贈る……………三七

三二、戦線銃後主従美談……………三八

三三、この勇士にしてこの妻女あり……………三八

三四、點字に示す誠の結晶……………三八

三五、銃後は完し、リヤカーひく國婦組長……………三八

三六、病院に咲く花二輪……………三八

三七、病後の身をも顧みず瀕死の勇士へ輸血……………三九

三八、傷痍軍人の家を授ける美談の主……………三九

三九、武運祈願五十餘社……………三九

四〇、勇士の病母をリヤカーで毎日病院へ……………三九

四一、助け合ふのが戦友と床し勇士の妻女……………三九

四二、銃後を護る尉と婦……………三九

四三、か弱き乙女の身で一家十六人の柱……………三九

四四、小僧さんに代り勇士の家を守る童心……………三九

四五、日參少女の純情蕙……………三九

四六、銃後を護る警察署員の妻女……………三九

四七、白衣勇士の一家へ温い手……………三九

……… 名古屋婦人の心意氣……………三九

四八、軍國婆さん、勇士の家庭へ生きた便り……………三九

四九、半島出身の模範青年……………三九

五〇、戦線の勞苦を偲び勇士の子に温い情……………三九

五一、勇士の心を汲む孤獨の老母……………四〇

五二、戦線と銃後とを結ぶ温い友情……………四〇

五三、銃後は芳ばし努力の小店員……………四〇

五四、銃後を守る町總代と女醫……………四〇

五五、銃後の龜鑑……………四〇

五六、傷より深い心の悔みに投げる光明……………四〇

五七、凱旋して始めて知る愛妻の死……………四〇

五八、偉大なる教化、兒童と共に神苑の清掃……………四〇

五九、純情の小旗振つて兵隊さんを歡送迎……………四〇

六〇、鬼將軍も感激の涙……………四〇

……… 「我子に知らすな」と老父の遺言……………四〇

六一、織なす錦……………四〇

六二、父の遺訓を守り……………四〇

……… 一家を背負ふ軍國少年……………四〇

六三、銃後に光る老翁の報國……………四〇

六四、箒で奉仕の六人少女……………四〇

六五、銃後に咲く誠意の華……………四〇

六六、主家を扶けた軍國店員……………四〇

六七、健氣な三人の女給さん……………四〇

六八、遺児の上に幸あれ……………四〇

六九、勇士の子供へお小遣やお守り……………四〇

七〇、真心一ぱいの慰問袋……………四〇

七一、日本の妻敏子さん……………四〇

七二、奇縁が結ぶ戦線と銃後……………四〇

七三、親切な軍國家主さん……………四〇

七三、赤誠こめた感激の献金……………四〇

七五、健氣な勇士の妻……………四〇

……… 「坊が父うちやんの身代りよ」……………四〇

七六、尊くも強き親心……………四〇

七七、勇士の家へ日用品……………四〇

七八、兵隊婆さん……………一五七

七九、天晴れ寫眞報國……………一五八

八〇、愛馬の鬘を腰に奮戦……………一五九

八一、六人の弟を戦線に送り、
自分は毎日日參團指導……………一六〇

八二、一家再興、戦死の夫と二人分……………一六一

八三、女主人を助けて咲かす銃後の華……………一六二

八四、松葉杖に托して日參團……………一六三

八五、彈丸に死すとも病に死すな……………一六四

八六、戦線から頼む妹の入學……………一六五

八七、生活戦線に闘ふ健氣な軍國女性……………一六六

八八、銃後寺院の活躍……………一六七

八九、女子青年義勇隊の銃後活躍……………一六八

一六九、………一六九

一七〇、………一七〇

一七一、………一七一

一七二、………一七二

一七三、………一七三

一七四、………一七四

一七五、………一七五

一七六、………一七六

一七七、………一七七

一七八、………一七八

一七九、………一七九

一八〇、………一八〇

○日國國史の編纂に關し、須田大風は、其の編纂委員として、其の責を授けられた。其の編纂委員として、其の責を授けられた。其の編纂委員として、其の責を授けられた。

戦線銃後美談集 第二輯

夜叉か鬼神か攻撃精神の権化片桐少尉

故陸軍歩兵少尉片桐善一氏（昭和區大喜新町二ノ五）は明治三十六年九月二十日、市内中區橋町一ノ四に呱呱の聲を擧げた。幼い時から、重厚の中に勇氣と不撓不屈の精神とを藏し、且つ進取の氣性に富んでゐた。性格の然らしむる處か、夙に軍人たらしむことを志し、年少から武を練り、劍道五段の腕前の所有者であつた。宿志叶つて大正十二年現役志願兵として歩兵第六聯隊に入隊した。爾來、常に模範兵として、その昇進も格別早かつた。後、昭和九年から二ヶ年餘、滿洲派遣軍に屬して、北滿警備の重任に就いた。

頃には、もう歩兵軍曹に累進してゐた。豪膽な君は、各地の討伐に赫々の武勳を樹て、匪賊の首級を擧ぐることに實に七十有餘、鬼軍曹の勇名を馳せたのも決して故なしとしな
い。翌年には歩兵准尉に榮進した。○（註）君の戦歴は、前掲の通りである。○（註）君は、大正十二年
今次事變勃發するや、逸早く○○部隊に屬し、彼の世界戦史上未曾有の上海吳淞鐵道
棧橋敵前上陸を敢行した。何時如何なる場合にも積極進取の君は、上陸間もない○月○
日の紀家附近の戦には、遅々として進捗せぬ膠着狀戦況を見て大いに期するところあ
り、敢然起つて、小銃・機關銃の二ヶ小隊を率ゐ、神速果敢な行動と有効適切な指揮と
によつて、同地域左突角を占領、全線戦捷の端緒を開き、軍行動に甚大な便宜を與へ
た。その功績は先づ以て殊勳甲に該當するものであつた。

次いで、魏家巷の戦闘・復旦大學の攻撃には、頑強なる敵陣左翼へ奇襲を敢行し、得
意の腕を振つて狼狽する敵兵二十三名を瞬時に袈裟斬にした。まことに鬼神の業ともい
ふべきである。（註）君の戦歴は、前掲の通りである。○（註）君は、大正十二年

○月○日四圍兒の激戦には、隊長安田大尉が名譽の戦死を遂げられた後を受けて中隊

の指揮を乗り、大いに士氣を鼓舞した。

○月○日西趙家角の激戦には、頑強なる敵大部隊の猛逆襲を受けたが、沈着にして
剛勇な君は、少しも動ぜず、克く部下を指揮し、中隊の全火力を擧げてこれに應戦、携
行弾既に盡くるや、白兵突撃を下命、自らその先頭に立つて阿修羅の如く敵部隊の眞只
中に躍り込み、やにはに敵二十數名を斬り倒した。返り血を浴び血達摩の如くなつてな
ほも奮戦する所に、小癩にも大青龍刀を振り翳して斬りかゝつて來た敵將を、眞向から
青龍刀諸共梨割にして愛刀肥後延壽を鏝元から折るなど、獅子奮迅の働きは勇壯の極に
達した。（註）君の戦歴は、前掲の通りである。○（註）君は、大正十二年

越えて○月○日蘇州河の激戦には率先、決死隊に加はつて力戦奮闘、續いて南市の
追撃戦には、尖兵長として追撃に追撃、猛前進を續行した。市街兩角のトイチカ陣地か
らは、こゝを先途と一齊の亂射亂撃。然も君の闘志攻撃精神は倍々旺盛。烈火の如き憤
りを發して部下を督勵。○○砲及び機關銃の、銃砲身も熔けよとばかりに應戦しつゝ、
歩一步と敵陣に肉迫した。折りしも飛來した敵トイチカからの一彈は、無念にも君の左

大腿部にぐつさどばかり命中した。「うぬいやつたな！ ようしつー」と、勇猛剛氣な君はこの負傷に怯むどころか、却つて勇氣百倍、怒髪天を衝くの概を示して憤然として前進に前進。行く行く市街路上の敵數人を薙ぎ倒した。彈劍からの出血、淋漓として戎衣に滴るも、また顧みず、鬼神も斯くやとばかり奮戦を續ける中に、一彈また一彈と、今は身に數彈を受くるに至つた。如何に心は夜叉鬼神の再來の如しと雖も身は鐵石ではない、あびたゞしい出血の爲めに流石剛氣無双の君も、遂に意識不明となつて昏倒した。やがて假繩帶所に收容せられたが、その手當も既に時機遅れ、また奏効するに至らず、「これしきの傷で斃れるとは、誠に陛下に對して申譯ない！」との一語を名残りにも、「天皇陛下萬歲」の聲もかすかに護國の鬼と化した。時に昭和十二年十一月十二日午後十一時であつた。自ら突進し、自ら自らの武闘の立、國の爲に身を犠牲にす。即日歩兵少尉に任ぜられ、殊勳甲勳五等功五級を賜はり、靖國鎮護の武神として百世に廟食するの光榮に浴した。殉國の英靈も、聖恩の無窮に感泣し、以て冥することであらう。

君洵に武夫劍に倚り東西に叱咤し、君國の爲めに殉ずる、素より本懐とするところではあるが、君をしてせめて大場鎮・南京攻略、さては武漢三鎮の撃滅戦まで武運を長からしめ、その膽とその腕とを存分に振はしめたならばと念へば、君の戦死はかへすくも遺憾の極みである。君を最もよく知る戦友下村少尉は、君の戦功を具さに録し、以て君を弔うて曰く、君が忠烈は東亞永遠の平和の鐵楔、躍進日本の尊き礎石として、その武勳は永く聖戦史上を飾らん。と。眞に君を頌して餘蘊なき至言と謂ふべきである。去る昭和〇〇年〇月〇日、安徽省上谿附近の激戦で決死の傳令として奮戦し、つひに頭部貫通銃創をうけ護國の華と散つた加藤眞平伍長（中區横三藏町二丁目）誕生の地は

岐阜縣可兒郡伏見村である。この村の南には可兒川と言ふ美しい川が流れて、丁度この部落一帯を削り残したやうな狭い盆地をかたちづくつてゐる。その盆地の一角、小高い岡の上には子安観音が祀つてある。村人達はうれしうにつけかなしいにつけ、きつとこの観音様にお詣りして、い

としい我が子の行末を一心にお祈りするのである。真平君のお母さんもよくこの観音様へ子供の手をひいてお詣りした。そのお蔭で真平君は小さい時から大した病氣もせず宛ら若竹がのびるやうにすくすくと生ひ育つた。

真平君の小學校の成績は、相當によく出来る方であつたが、元來正直者で無口な子であつたため、あまり目に立つ子供ではなかつた。だから或る先生からは「ぼんやり者だ。」「かたいぢな子だ。」と言はれてをつた。然し受持の先生からは随分可愛がられたものである。

真平君が五年生の或る日、受持の先生が學校をお休みになつた。日頃先生に叱られて教室の中では小さくなつてゐた腕白小僧達は、この時ぞとばかり、朝から大へんなはし

やぎ方であつた。午前の授業が終つて、お晝休みに真平君が何心なくぼんやり廊下に立つてゐると、同級の中でも一番餓鬼大將の勘太が、大勢の者に騎馬を作らせ「おい、真平。これから皆で騎馬戦をするのだぞ、お前も仲間にしてやるからこの馬に乗れ。何、いやだ。いやも何もあるかい。おい、みんな真平を馬に乗せろ。」いやがる真平君をむりやりに乗せた勘太は、「さあ、これで人数がそろつた。みんな二手に別れて、歌を歌ひながら両方から進んでぶつつかるのだぞ、いゝかい。よゝい、始め！」

天に代りて不義を討つ 忠勇無双のわが兵は

萬死恐れず敵情を……

「オー、ワイショ〜。」「そら真平、いくぞ。組討ちだ。」「うむ〜。」「ワイショ〜。」

暫くもんでゐたが、真平君はつひにねぢふせられ、あふむけにどつと倒れたそのはづみに、「ガラ〜、バシン。」と廊下のガラスをわつてしまった。

「ワー。大變だ。そら、逃げる。」みんな騎馬戦をやめて何處へか逃げてしまった。

その後へこの物音を聞きつけて看護當番の先生がとんで來られた時には、眞平君だけが紅く血ににじんだ頭をかへて、われたガラスをうらめしげに見つめてをつた。

「馬鹿。お前だな、今ガラスをわつたのは……」

「先生。すみません。僕が……僕が……」

「うむ……言ひわけがあつたらあちらで聞かう、さあ早く先生について來い。」

先生に連れられて職員室に入つた眞平は、校長先生から、色々と尋ねられた。

「今ガラスをわつたのはお前かい。どうしてわつたか言つてごらん。何に……かんにんして下さい……うむ、許してあげるから、どうしてわつたか正直にいつてごらん。……何に……言へない……どうして言へないのだ。云へないやうないたづらでもしたのかい。」

「先生すみません。」

「うむ、すみませんはい、から、なぜガラスをわつたか、そのわけをはつきり言ひなさい。」

「だつて……だつて、それは言ひたくないのです。」

「なに。言ひたくない。さうか、どうしても言ひたくないのか。あい、眞平。お前はなぜそんなに剛情なことを言ふのだ。どうしても言はなければ仕方がない。こゝにしばらく残つておいで……」

かう言つたまま、校長先生はどこかへ立つて行かれた。眞平君は、一思ひに今までのことを言つてしまはふかと思つた。

「しかし、今更自分がこゝでいひわけしたつてわれたガラスが元のものになる筈はない。それに、勘太のことを先生に話せば、又後で勘太がどんなに自分を怒るかも知れない。うむ……やつぱり自分一人で罪をかぶつておかう。」と、眞平君は固く決心した。

その日眞平君は、夕方近くになつて漸く許されて歸つた。泣いて歸つては人に恥かしい。泣くまいかと、こらへにこらへて來た眞平も、わが家の敷居をまたいで「お母さん。たいいま。」と聲をかけた時にはもう胸が一ぱいにつまつて「わあ。」と聲をあげて泣いた。「お、眞平や、おかへり。うむ、どうしたか。」

「お母さん。僕は……僕は……今まで學校に残されたのです。……僕が悪くはないのに、先生から……」「いや、悪くないのに先生がお叱りになる筈はない。それはまだお前の考へが足らぬ。どんな事の起りもみんな自分が悪いのだと思へば腹もたぬ。言ひたいことがあつても、だまつて辛抱してゐるのがえらいのだ。なあ、眞平や。みんなわたしがよく知つてゐる。泣くんじ

やない、泣くんぢやない。おしさうく、つい忘れてゐた。今日、お隣からおみやげを
 いたゞいた。これをあげるから、さあ、きげんをなほしてね。」
 かうした優しいお母さんに育てられて来た眞平君は、本當にもひやりの深い友情に
 富んだ素直な子供であつた。この出来事は、後に受持の先生に知れ、眞平君の人がら
 一層愛して下さることになつた。かうしてつながれた師弟の情誼は、眞平君が尋常科を
 卒業して東濃中學へ入學してからも、又中學を卒業して名古屋の或る會社に勤めるやう
 になつてからも、益々濃やかとなり、先生はまるで自分の弟のやうに可愛がつて下さつ
 た。だから眞平君は、會社の勤めの忙しい時にも、ふるさとの恩師の所とお母さんの所
 へは決して手紙を怠つたことはなかつた。又先生からも時々手紙が届いたが、眞平君は
 この手紙を一つもなくせず、ちゃんとしまつてゐた。
 眞平君が會社へはいつの間もなく、懐しい先生の許へ、自分の行末のことをこまま
 と認めて送つた。すると先生から次のやうな手紙が届いた。

—(前略)—社會人としてはかね／＼君にも教へた通り、己の分を知つて仕事に忠實な

ことが一番大切です。不平をいふ人は決して出世することが出来ません。たゞ一途に
 己の分を全うし、滅私奉公の精神で勉強しなさい、これが私からの唯一の餞です—(下
 略)—

この手紙をいたゞいた眞平君は、思はずこぶしをにぎりしめ、「これだ。これだ。こ
 れこそ僕の將來進むべき道だ。」と幾度も幾度も叫び、何時に變らぬ恩師の温い教訓に感
 じ入るのであつた。

この滅私奉公の精神は、眞平君が後に軍隊に入營してからいよいよ深く心にきざみつ
 けられ、一意専心忠實に軍務に服し、上官からはとても可愛がられ、上等兵に昇進し、
 眞平君は兵營内の人氣の中心となつた。

眞平君は、昭和九年十二月六日滿洲事變に出動し、數々の戦功を樹て、内地へ歸還し
 てから名古屋市中區横三藏の叔母八重さんの許へ養子となつてひきとられた。

昭和十二年七月七日蘆溝橋事件がきっかけとなつて、遂に今次の支那事變が始まるや
 正義日本は暴戾な支那軍を膺懲し東洋永遠の平和を確保するため戈をとつてたちあがつ

た。日本軍は支那軍を打ち破り、東清鉄道の平漢線を占領するに至り、支那軍は退却した。

加藤真平等兵は倉永部隊に属し、いよいよ晴の出征をすることになった。戦は先づ北支に始まり、ついで上海にとび、我が陸戦隊は敵の大軍をひかふにまはして、およそ二十日間文字通りの悪戦苦闘をつづけた。その上、上海の北方には、支那軍が何年もかゝつて築き上げた、堅固な陣地が幾重もつらなり、その間にはクリークが幾筋も流れてゐるので、忠勇義烈な我が軍も攻めあぐみ、本國からの陸軍の到着を今や遅しと待つてゐた。

〇月〇〇日、いよいよ我が陸軍が吳淞附近に敵前上陸をするや、真平等兵は幾度か死線を越え、數々の勇ましいてがらを樹てた。中でも、西六房の敵陣地攻撃の時は、〇〇小隊長の部下として竹藪陣地に決死の突入をして、逃げまどふ敵兵どもを片つばしから突きふせなぎたふし、とうとう見事に占領し、戦友と手を取り合つて天地も崩れよと感激の喊聲をあげた。その時、真平等兵の胸底からこみ上げて來たものは、ふるさとの母、兄弟、恩師、わけても病の床についてゐる名古屋の養母のことだつた。真平等

等兵は、その日の感激の模様をこまかく認め、養母八重さんの許へ送つた。

「お母様御病氣は如何で御座いますか。ちつとはおよろしい方ですか。私は上陸以來砲煙彈雨の下をくゞつて死線を過ぎること幾度、その時といへども決して忘れたことのないのはお母様の御病氣のことです。誰一人身よりのないお母様、今頃どうしていらつしやることだらうと思はぬ日とではありません。お母様が苦しい中からも、私の身の上をおあんじ下さることだらうなどと思ふと、ひとりでに目頭が熱くなつてまゐります。お母様、お喜び下さい、私は上陸以來度々の合戦にも、不思議とかすりさず一つも受けず、元氣一杯に戦つてをります。今日は〇〇方面の竹藪陣地に決死の突入をして、感激の萬歳を叫びました。私の叫んだ萬歳の聲が、萬里の波を越え、お母様の耳へ聞えて行つたやうな氣がしてなりません。お母様、お一人で寂しいことでは。よくよく考へてみれば私達は淡い運命のつながりでした。お母様の許へ養はれてから、何一つそれらしい孝養も盡くさず、遂に戦線に立ちました。支那兵の頑強なことは豫想以上です。日本男子として一度戦場にいでは、生きて再び還らぬ決心です。

親に先立つ不孝は幾重にもお許し下さい。お母様、どうかもう一度丈夫なお體になつて、私の武功を御覽下さい……。

母上様へ

眞平より

今日の戦にへと／＼につかれた身を塹壕の中に伏せ、一本の蠟燭の光をたよりに、養母八重さんのもとへこま／＼と書きしるして手紙を送つたのも、何か豫感があつたのかも知れない。

それから幾度かの戦の後、大場鎮附近の池溝宅の戦闘に、敵の第一第二陣地を突破して、決死の傳令に向かふ途中、遂に敵弾頭部を貫通して護國の鬼と化したのである。

悲報一度病床の八重さんのもとに至るや、如何にも軍國の母らしく涙一つ見せず、

「私は眞平を戦場に送り出したその時から、命はすでにお國にさしげて無いものと覺悟してをりました。天皇陛下の御爲、日本のために死んで呉れた眞平です。本當によくやつて呉れました。私はよろこんでをります。」と、これこそまことに軍國の母の尊き姿だ。かうした立派な母にしてこの子あり。これこそまことに軍國の母の尊き姿だ。かうした立派な母にしてこの子あり。

なお母さんに養はれた眞平上等兵は、二十五歳を一期として大君の御楯となつてたふれたのである。

加藤上等兵は名譽の戦死と同時に伍長にすゝみ、やがて殊勳甲勳七等功六級を賜つた。

三、大別山の散華

中區大清水町長坂さむさん長男孝之伍長は、昭和〇〇年〇月〇〇日上海に敵前上陸以來、あの激しい上海戦に目覚ましい働きをして名譽の戦傷を負うたが幸ひ野戦病院で治療のかひあつて再び戦線に立ち、南京攻略戦、徐州會戦と常に第一線に奮闘を續けた。その功績は枚擧に遑ない程である。

その後、暫く津浦線鐵道警備隊員としてよくその責任を果し、いよいよあの漢口攻略戦が始まると、伍長の屬する〇〇部隊は揚子江北岸を進撃して、天然の峻嶮といはれる大別山脈の敵を撃滅することになった。

大別山脈は支那に於ても名だたる峻嶒である。然も、敵は大軍を擁してこの天嶮を頑強に死守した。わが精銳は破竹の勢をもつて敵を撃破しつゝ進撃又進撃、〇〇部隊は山脈西方の敵の退路を断つべく湖北省隨縣浙河附近に進んだが、こゝに到着するや、敵將李宗仁の指揮する廣西軍約一萬の猛烈な抵抗を受けた上海戦以來の激戦が展開されたのである。苦戦であつたが、わが忠勇な〇〇部隊の精兵は、よく之を撃ち破つて、遂に浙河を占領した。この時長坂伍長の屬する隊は、部隊の第一線となつて浙河西南方三籽雷家坡附近の廣い高地の占領確保を命ぜられた。長坂伍長はその中の第三分隊長として、俗にいふ笠松高地の右側三本松高地を守備することゝなつた。

長坂伍長は命を受けるや、克く部下を勵ましつゝ、岩石重疊する山頂に堅固な陣地を構築した。實に沈着剛膽な作業であつた。陣地が出来上るや、分隊全員を配備して敵の逆襲が何時あつてもびくともしない嚴重な警備をした。

秋も末の午前五時頃、まだ夜は明けきらないので薄暗い。敵は豫てこの三本松高地を奪還しようと計畫してゐたと見え、暗さに乗じて突然迫撃砲彈の集中砲火を浴びせかけ

た。分隊長長坂伍長は小癩なとばかり、直に應戦の火蓋を切つた。敵兵もさる者、三百名ばかり陣地間近に肉薄して手榴彈を雨霰と投げかけ、後方からは機關銃を亂射し、その勢なか／＼悔りがたいものがあつた。味方は少數である。この凄じい逆襲に味方陣地には死傷續出、然も沈着剛膽な伍長は少しも屈せず部下を勵まし勵まし、自ら陣頭に立つて一歩も退かじと阿修羅の如き奮闘を續けて敵の逆襲を支へた。たま／＼、敵の一彈飛來して、無慘にも奮戦中の長坂伍長の頭部を貫通した。鮮血に染まつて倒れた伍長は、氣丈にも 天皇陛下萬歳を聲高々と絶叫した。嗚呼！事變勃發以來數々の武勳を樹てた長坂伍長は、遂に大別山の華と散つたのである。

伍長の父は五年前に亡くなつて、母と二人暮しの家庭であつたが、その中から伍長は三菱航空會社に勤務してよく母につかへ、近所でも孝行息子の評判が高かつた。

平素のこの純孝はひと度戦場に出づるや、こゝに赫々たる忠烈の武勳となり、靖國の御社に永久の譽れを輝かしたのである。

四、戦線の美舉

市内西區天神山町一丁目百三番地故陸軍歩兵大尉宮川新作氏は、支那事變勃發するや、昭和〇〇年〇月〇日大命を拜受、〇〇派遣軍〇〇部隊に屬し勇躍征途に上り、爾來一年八ヶ月、江南の野に一身を挺して君國の爲に盡忠報國の誠をつくし、天晴れ武威を中外に宣揚しつゝあつたが、〇〇年〇月〇日湖北省隨縣北方風火山東方高地の戦闘に於て、敵の猛射を浴びながら、勇猛果敢、士氣昂然陣地を蹴つて進撃中、雨飛する一彈右胸部を貫通、鮮血淋漓流れ出づる中に「無念」の一語を残し遂に江南の華と散り、護國の神と化した。

〇〇年〇月〇〇日同氏差出しの榎尋常小學校長宛封書が到着した。開いて見ると、手紙に添へて金拾圓封入してあつた。そして、

「同封の金は甚だ輕少には候へ共、出動軍人遺家族の子弟にて若し不遇の者有之候節は、たとへ鉛筆一本にても御分配下され候はば幸甚に御座候。」

と書いてあつた。

翌〇〇年〇月〇日附を以て再度金貳拾圓の送金があつたので、校長杉浦氏はいたく感激し、郷土出身勇士の美舉として、早速職員に傳へ、一方兒童にも訓話した所、讀む者聞く者、誰一人感動しないものはなかつた。

協議の結果、右の尊き金員を品に替へ、出征家族の兒童に頒ち、氏の意志を傳へたところ、これを受けた者は、一入感激の涙と欣びとに奮ひ立ち、同氏の深き芳志を永久に美談として語り傳へてゐる。

尙、氏は出征中常に第一線に奮闘しながらも、小國民の教育に心を致し、遺家族子弟を思ふの熱情から、參考資料として度々戦線の情報を書き送つた。噫、氏の如きは洵に戦線の御奉公と銃後の護りとを共に兼ね行うた武人の龜鑑といふべきである。

五、兄の屍を越えて天晴れ仇討

「天皇陛下の御爲に、死ぬ時は必ず一處だぞ。」と固く誓ひ合つて出征した兄弟勇士が、

めづらしくも同じ〇〇部隊の〇隊で、昭和〇〇年の上海戦以來、同じ戦闘に参加して活躍して居た。この勇士は、東區報徳町一四出身の神谷秀雄軍曹（兄）と神谷正次上等兵（弟）とで、出征以來八ヶ月目の或日、同じ隊にあつて壽縣東方約八軒の頑強な敵陣地を攻撃して居た。この時兄の秀雄軍曹は、機關銃隊の〇隊長として阿修羅の如く第一線に奮戦してゐたが、飛來つた一弾に右胸部を射抜かれて、壯烈極まる名譽の戦死を遂げた。同じ戦線にあつて必死の奮闘を續けて居た弟の正次上等兵は、傳令の戦友からこの悲報を聞くや、少しもひるまず、兄を倒したと思はれる敵トーチカに向ひ銃身も焼けよとばかり、猛射を續けた。部下を思ふ情の厚い〇〇部隊長は、正次上等兵の心を察して「兄秀雄軍曹の遺骸を收容せよ。」と命じた。

敵は、僅かに百五十米の前面にあつて、チェッコ機關銃で狙ひ撃ちに彈雨を浴びせかけるので、頭も上げ得ない状況だったが、正次上等兵は單身匍匐しながら、兄の許へ近づいて行つた。忽ちチェッコ機關銃がバラ／＼と無氣味な音を立て、集中射撃を浴びせかけ、後方で見えてゐる〇〇部隊長以下の將兵をして「やられたかな」とハラハラさせる。併し

死よりも強い兄弟愛に燃えた正次上等兵の尊い姿には、雨と注ぐ彈丸も一發として命中しない。かうして無事に兄の遺骸を收容する事ができた正次上等兵は、暫く兄の靈に默禱を捧げた後、第一線に馳せ參じ、前面のトーチカ眼がけ勇敢に突撃して敵を殲滅し、見事兄の仇討をなしたとげたのである。

正次上等兵は「部隊長はじめ皆さんに惜しまれて死んだ兄は、さつと満足してゐるでせう。あの一時間前、自分が傳令になつて兄の隊を訪れた時「敵弾が低いから氣をつけろ。」と、壕の中から注意してくれました。なあと、兄の分はこれから自分が二倍働きます。」と頼母しくも力強く語りつゝ、兄の冥福を祈るのであつた。

六、非常時日本女性の鑑

夫の戦死後、あどけない三人の子女を抱へて、よく其の遺命を奉じ、家業を守り、子女の養育に盡瘁して、長期戦下の女性の鑑と稱へられてゐるのは、中村區米野町戸崎二

七故陸軍歩兵曹長村瀬十二氏の妻女たき子さんである。たき子さんは、夫の戦死後も、よく女の細腕に、女中一人、使用人二人を督して家業の氷卸商を經營、夫の出征前にもまさる成績をあげ、三人の子女の成長を楽しみに、町内からの援護の申出も、「自力の續く限りは」と辭退して健氣な活動を續けてゐる。

此に、たき子さんが夫の遺命を果した常人の及ばぬ見上げた挿話がある。夫村瀬十二氏は中村青年學校教練指導員として勤務中、一昨昨年秋〇〇部隊に屬して應召出征し各地に轉戦武勳を樹て、昨年〇月〇〇日河南省羅山縣黄河灣の敵を攻撃中、敵彈に斃れた戦友をクリークを渡つて後送し、再び身を挺して奮進中、身に三彈を受けて遂に名譽の戦死を遂げたのである。其間、同氏は家を忘れ妻子を忘れて奮戦し、家庭への便りの如きも、只無事を報ずる葉書を持たせ送るのみであつたが、徐州會戦前、姉の許に珍しくも封書を送り、其の中にたき子さんへの遺書までも同封して、決死の意氣物凄く前進したのであつた。其節たき子さんへの便りには

「前略……此度は戦死覺悟にて日本軍人として恥しからぬ行動を致す覺悟に候へば御

安心下され度此段戦死の報至らざれば小生元氣なりと安心致すべく候戦死致し候節は店は御身の自由にまかし申候（前之川其他の相談を受くべし）子供を立派に育てることを祈居申候

若し戦死の報至るも取りみだしたることなく帝國軍人として立派な妻たることを忘れまじく御願ひ申上候

三河屋の件は戦死の節は適當に處置されし小生生あれば歸國の節申す今取急げば心そこに行かず戦闘にて心一杯なり本日は此の手紙一報より書かず皆様によりしく申し下され度候」後略

註 前之川……村瀬氏の姉をさす

三河屋の件……賣掛代金集金についての件なり

とあり、村瀬氏の決意の程が伺はれて胸の迫る思ひがする。其後、村瀬氏は遂に護國の華と散り、前之川の姉に託された遺書は、たき子さんに渡されたのである。同封書には「小生戦死の節はたき子にお渡し下され度願上候生あれば小生受取り申し候其れ迄封

を切らぬ様願ひ上候」とあり中には
華「左記御願申上候
保険金七千圓ノ内意の
寄附金壹千圓也
内譯

中村 小 青 年 同 學 校

壹百圓也

石海小學校(註村瀨氏出身校)

壹百圓也

在郷軍人旭分會

五拾圓也

在郷軍人旭分會第一班

壹百圓也

熱田 神 宮

壹百圓也

聯合町 氏 神

壹百圓也

安國 防 費

壹百圓也

市 教 育 會

壹百圓也

聯 合 町

壹百圓也

町 常 務 會

壹百圓也

常 樂 町

五拾圓也

(右原文のまま)

かうして一家の柱石を失つたたき子さんは、夫の遺命を奉じ天晴れ帝國軍人の妻として、健氣にも女手に子女の養育を引受け、一家の經營に席のあたゝまる暇もなく活動しながら、夫の遺志ですからと、各方面に寄附をしてまはり、聯區、町内、在郷軍人會其他諸團體で執行された慰靈祭には、忙しい身を一度もかゝさず、しかも御供物まで携へて必ず參列し、亡き夫の靈を慰めてゐる。此のたき子さんの眞摯な姿は、ひとり草葉の陰の村瀨氏よろこびのみならず、見る人をして「眞に非常時日本女性の鑑」と賞讃の辭を放たしめてゐる。

七、「最後の御奉公」と陸軍病院でお手傳ひ

名古屋市陸軍病院東練兵場分院が開設されて二年——この間雨の日も風の日も一日として休むことなく、忙がしい患者面會人の整理や世話等を奉仕的に手傳つてゐる篤志家がある。この奇特な人は、名古屋市昭和區御器所町字北市場四に住む鶴飼坦(六九)さんといふ退役歩兵准尉で、日清・日露の兩戦役に出征した老勇士である。

氏は明治三十七、八年戦役に後備兵として歩兵第三十六聯隊に召集され、乃木軍に屬して旅順攻圍戦に参加、二龍山の激戦に於て前後數回に亘り全身に十九ヶ所の銃創と刺傷を負つたが、武運強くも奇蹟的に一命を完うし、奉天の大會戦にまで従軍、赫々たる武勳を樹て、乃木軍司令官並に川村軍司令官から感状を授與された。

凱旋後勳六等功六級の金鷄勳章を拜受したのみならず、其の勳功畏くも天聽に達し、明治天皇に拜謁を賜はり、天盃を下賜されるの光榮に浴した。退役後東京在住當時は中等學校の體操教師をつとめ、明治四十年名古屋へ移住後は、第八高等學校の體操教官

を奉職、青年の軍事教練に二十年間専念して來た。前小田愛知縣學務部長、前早川同警察部長は、八高在學時代この鶴飼さんから嚴格な軍事教練を受けた人々である。

老勇士鶴飼さんは、八高退職後愛孫二人のお守を樂しみながら、餘生を送つて居たが今次事變勃發と同時に、東練兵場分院が開設されて、名譽の戦傷勇士が收容されることとなるや、「せめてもの國家に對する最後の御奉公である」と、自ら進んで同分院面會所の整理や、面會人の受付係を引き受け、元氣な衛生兵達と共に勤勞奉仕をつげ、師團當局を深く感激せしめてゐる。當の鶴飼さんは、奉仕の動機について、次の如く語られたと。

「此の分院が開設されました時、知人の患者を見舞に參りました所、面會所が大變な混雜でして、然も勝手のわからぬ衛生兵の方たちが、整理や受付等にお困りの様子を見ましたので、老骨ではあるが、この非常時局に徒食して安閑と過ごしてをることは國家に對して誠に申譯ないと思ひまして、お手傳を申出ました所、早速お許しを得ましたので、かうして毎日お手傳をして居る次第であります。一向お役に立ちませんが、國家

への御奉公と存じまして、手銭手辨當で通つてをります。どうか此の事は絶対に御發表にならぬやうに。」と奥ゆかしさを示してゐた。

八、護りは固し銃後八少年

昭和區櫻井町二牛乳販賣業小山恵子(三四)さんの主人周太郎氏は一昨年〇月〇〇部隊に屬し出征したが、恵子さんは其の日から自轉車の稽古をはじめ繊弱い女の身一つで、消毒・配達・集金等男二人分の仕事をやつてのけ「天晴れ勇士の妻よ。」と近所の評判を集めて居たが、此の三月初めかりそめの病がもとで、四月末にはドツと床につき枕もあげ得ぬ重態の身となつてしまつた。「今倒れては戦地の夫に申しわけが立たぬ。近所の人々に迷惑をかけてはならぬ。」と、恵子さんの焦燥は深かつたが、病は日々につるるばかりであつた。

然るに恵子さんの夫周太郎氏は、愛妻の重症も知らず、本年五月一日に戦地より御器

所小学校長堀江恒右衛門氏宛に、兒童の學用品のたしにとて金五圓を送つた。

この戦地の夫と、この銃後の妻とに感激した堀江校長は、朝會に於て早速小山さんの話をきかせ「何とかお手傳をしてあげたいものだ。」と話をした。此の話をきいて其の場で「よしお手傳ひしよう。」「うん。」「やらう。」と健氣な決心をした八人の少年達があつた。

この少年こそ御器所校六年生高石組の優等生恵良哲、坂倉充、服部銈一、安福裕の四君、それに小山さんの近所の兵藤秀壽、高原尙、三輪豊、澤田郁男の四君の都合八人であつた。此の八人の少年部隊の勇士は早速家に歸り、父母の許を得て、其の翌日から自轉車で配達を開始、午前五時と午後二時の二回に亘つて二百餘軒の得意先を廻つた上、注文取りにまで出かける涙ぐましさであつた。

斯くて十日、二十日と晴雨に拘はらず汗まみれになつて懸命で配達を續けた。一ヶ月後恵子さんは病氣も全快したので、元氣一ぱいの顔に感謝の色を表し早速學校に堀江校長を訪ね、擔任高石先生の所へも行つて丁寧にお禮を申し上げた。そして「皆さんが、

どうしても受取りになりませんので先生から上げて下さい。」と澤山の鉛筆を出した。高石先生は、其の日始めて皆の前で、八人の少年をほめた。みんなのやつた事は小さな事でも、勇士の家を護らう、勇士に安心して働いて頂かうとする氣持は尊い。此の心を育て上げて、此の真心で國家を護らう。」と諭し、澤山の鉛筆の中から特に「丹心報國」と書かれてある眞赤な色の鉛筆を一本づつ取り上げて、「之を記念にしよう。先生も一本頂いておかう。」と言つた。

少年達がこんなにして護つた勇士小山さんの家に悲しい知らせがあつた。あゝ、小山伍長殿戦死。悲しみの中に遺骨を迎へ、少年部隊は再び活動を開始した。そして今も元氣に續けてゐる。地下に於ける小山伍長の英靈も定めし感涙にむせんでゐることであらう。

九、銃後強化部隊ここに在り、敢然立つて工場を守る

中川區西古渡町中島にある金城製薬所は、水野信一さんと、その義弟伊藤義太郎さん

との共同經營で、二十人の職工を使つて盛大に營業されてゐた。ところが今次の事變で、二人相次で征途に就いた。水野さんの家庭には、義太郎さんの實姉である妻のはなさんと、九歳を頭に三男二女がある。又伊藤さんの家庭は、妻たづさんと母かくさんで、いづれも女・子供ばかりである。今後とも二十人の職工を指圖して仕事の切盛、問屋との折衝などをして行くことはとても出来ないで、たゞ休業の外に途無く、意を決して職工を集め、それ／＼退職金を分配して、一先づ工場閉鎖の止むを得ざる理由を言渡した。この時、職工一同は「今工場の竈の火を落して休業するのは、戦線に活躍中の主人に對しても申譯がない。なんとか、この工場を繼續する方法を考へていただきたい!!。たとへ止めるにしても、この退職手當を戴くなどは以ての外です。」と花も實もある美しい願に、家人一同はいたく感激し、事業を繼續することゝなつた。ところが其の後工場の資金は總て事業の運轉費に投ぜられ、餘財も乏しくなり、遂には、その日の生活にも事欠く程となつた。併し工場を有ち職工を使ふ境遇であるといふので、公共團體からの扶助もなく、全く途方に暮れる有様となつた。この時、同町柳田に住む、かくさんの弟(伊

藤義太郎さんの叔父に當る野田徳三郎さんは此の状態を見、更に職工の美しい話を聞くに及び、深く心を動かされ「よし、素人ではあるが、俺がやつて、せめても戦線の二人に心配はかけまい。」と敢然立つて、古い友人の、名古屋ガラス組合の役員を勤めてゐる、東區船付町平松ガラス工場主平松文次郎さんに相談をした。文次郎さんも他人事とは思はず、大いに力を入れて、組合の首脳部とも種々協議をした結果、「勇士の遺族を路頭に迷はせては組合として銃後の御奉公が果たせない。」と平松さんを後見役に、野田さんが中心となつて、同工場を再操業することとなつた。この重なる美しい話を知つた、同町の派出所巡査も「よし僕等もお力添をしよう。」と家族を激励し、なにかと便宜を計つた。さうして一時は経営主を戦線に送つて休業しようとした工場も、叔父、その友人、職工さん、それに管區の巡査、問屋など、打つて一丸とした力強い銃後部隊が編成せられ立派に工場を再操業させることが出来て、天晴れ銃後陣をいよいよ強化し、街の美談として聞く人見る人をして感激せしめてゐる。

一〇、バリカン持つ手を紫色に腫らして

東區東片端町一丁目、理髪業をいとなむ中村良作さんは、富山縣礪波郡平村下梨の出である。温厚實直な人であり、人に對し親切丁寧なので、近隣の評判もよく毎に隆盛を來たし、現在鍋屋中央理髪組合第六部長として推薦され、且つ棟棠聯區社會教育實行委員、家庭防護群長、町第三組長等を勤めてゐる。

今次事變勃發するや、理髪報國を思ひ立ち、組合員と話合ひ公休日の十七日を、戦傷病者慰問理髪日と定めた。その日には早朝から夫妻揃つて陸軍病院に赴き、バリカン持つ手の紫色に腫れるのも忘れて、次から次へと勇士の頭を刈つてゐる。他の同業者等が正午を限り引上げて、夫妻のみは踏み止まつて夕方まで仕事を続け、既に手がしびれて繼續不能となるに至るや、「明日又來ます。」と引下るのであつた。翌日になると、又早朝から出掛けて散髪するといふ奇特さに、勇士たちをいたく感激させ、この親切な床屋さんに何等かのお禮の方法をとまで申合させるに至つた。

此の中村さんの理髮報國はこれに止まらず。同業者たる市場町の神田秋一郎氏が、昭和〇〇年〇月、事變の爲め應召するや、後には妻女たね(三〇〇)さんが八歳を頭に三人の幼児と老父母とを抱へ、營業不能に陥つてゐるのを見て、その苦境に同情し、自家の職人岩谷常次郎君(二三〇)を同家に派し、無報酬で營業を繼續せしめ、同君が病むや、更に他の職人を派して、一日として休業せしめることなく、且つ之れが監督を怠らないのは勿論、家族の生活に至るまで、萬遺憾なきを期してゐる等、能ふ限りの後援を連續實行しつつある。

更に町内に出征軍人が宿泊する等の際には、連日にわたり理髮の無料奉仕を行ひ、又軍人遺家族に對しても理髮の無料奉仕を爲し、隣接せる勇士家族の良き相談相手となつて、慰安の途を講ずる等、實に隣保相扶の精神の權化、銃後國民の模範として推獎するに値する人といふべきである。うべなるかな、昨秋十月五日、縣知事から「軍事後援精神に努め其の事績顯著にして他の範とするに足る。」と、表彰されるに到つた。

内鮮融和の華

この程、笹島署へ「時局がら長髪を坊主頭にして得た斬髮代の一部です。」との文面に添へて金九圓が國防献金に寄託され、之を契機に内鮮融和の美談が明らかになつた。

この美擧の主は中村區米野町茶ノ木島六四、金判童さん(三五)外六名の半島出身者、發起人金さんは六年前妻の丁道辰さん(二七)と來名、知人の世話で西區新道町二、染色工場飯田作重さん(二八)方に雇はれ、内地の言葉も分らぬ不自由な身を、なにくれとなぐ勞つて下さる作重さん一家の恩義に感じて、黙々と働いてゐたが、一昨年の夏主人作重さんは召集令狀を手にして、數名の職工の中から特に金さんに「後を頼むぞ」と一言を残して勇躍應召された。金さんは萬金に値するこの主人の言葉を座右の銘として、心から有難くいたゞき、問屋から獨立して工場をたててはと勧められる言葉をも「主家の妻と子供二人が途方にくれるのを見殺しにするに忍びず」と、固辭して受けず、只管主家の發展と工場の繁榮とを期し、専心仕事に従事した。而して其の餘暇には、自家に於

いて我が半島出身者も何か御國の御爲にと心に秘し、自分が發起人となつて、長屋の同僚七名協力のもとに、毎月の斬髮代として五十錢宛を集め、それを國防献金として、斬髮は自らバリカンを手にして無報酬に行ふ有様、併し、金さんは少しの誇り顔もせず、「私達内地に暮らしていたゞけるのも御國の御蔭、兵役に加はれないのが残念」とばかり銃後戦士の一役を承はつて、主家の留守宅大事に、又自家一體の和合にと、しつかり銃後の護りにいそしんでゐる。

まもなく歸還された作重さんも、この立派な金さんの態度にすつかり感心、以前にも増して金さんを信頼し、數回に亘る工場整理にも、金さんだけは手放さず、固くスクラムを組んで職場を守りつゞけ生活の面倒を見てやり、聖戦下に於けるうるはしい内鮮一體の主従美談として、世に賞讃されると共に、金さんは協和會からも表彰を受けた。

一二、白衣勇士を慰問する少女の赤誠

昭和十四年三月、學年末休暇の或日の午後、名古屋第二陸軍病院の受付で、「このお金

を白衣の兵隊さん方に分けて上げて下さい。」と、差出した三少女があつた。

この少女等こそ、名古屋市八重小學校尋常科四年生古川貴美子さん、後藤道子さん、花井テルミさんの三人である。三人は同じ級友のしかも揃ひも揃つた優等生である。學校で常々、暑さ寒さのいとひなく正義のため戦つて居られる兵隊さん方のため、又戦に傷ついた身體を白衣に包み、病を養つて居られる白衣の勇士に對し、心から感謝しなくてはならぬと教へられ、又時局下資源愛護の如何に大切なことであるかといふ事を聞かされ、深く肝に銘ずるものがあつた。

三人は、昭和十三年四月の初旬から毎日の様に、登校下校の道すがらや陸まじい遊びの折々に、鐵屑・銀紙・ゴム屑を拾ひ蒐めた。さうして丁寧に整理して、鐵屑は花井さんの家、銀紙は古川さんの家、ゴム屑は後藤さんの家へとそれぞれ貯へておいた。雨の日も風の日もこの努力は続けられ、一ケ年はすぎた。

三人は相談して、此等の廢物を賣り其の上自分等の貯金してあつたお小遣を合せて、陸軍病院に勇士を慰問することゝなつたのである。

三人は、やがて各室を案内され、心から白衣の勇士に感謝し、慰問をして歸つたのであるが、其の後病院の受付に名も告げず、時々慰問を行つてゐる。誠に奇特な行ひといふべきである。

この三少女の白衣の勇士慰問と、廢品回収との時局に生きた二つの教訓は、學校當局や附近町内の話題ともなり、新聞にも報道されて、銃後を護る人々をいたく感動させた。それにも増して喜んだのは、戦地の兵隊さん達で、新聞の切抜が守護神と共に大切に取扱はれるまでの感激をあたへたのであつた。戦地から送られた數通の便の中に、次のやうなのがある。

初めての便りさぞ驚かれる事と存じます。私は今北支の山奥で第一線の勤務をして居る一兵士です。

先日内地から送られた新聞に、貴女達三名の記事がのつて居り、其れを読んで感激致し、此のつたない筆を運ぶのです。貴女達は白衣の勇士達を慰問して居られるとの事、何といふ立派な心掛でせう。私は新聞を読んで泣きました。戦友一同にも大きな

聲を出して読んで聞かせましたが、皆頭を下げて泣いてゐました。山又山の上の殘敵を追撃して、疲れた體を宿舍まで持ち運んで來た私達は、この記事を見て一べんに勇氣がみなぎつて來ました。

暑さが何だ。山岳戦が何だ。少しばかりの苦勞に氣がゆるんでたまるかと、皆大きな涙を流して感激したのです。誰一人顔を上げる者もありませんでした。(中略)

私達の一番嬉しいのは、幼き人々の真心からの慰問です。貴女達の真心のこもつた慰問を受けた白衣の兵隊さん達の傷は、どんなにか早く快方に向かふ事とせう。

私は三人の新聞に出て居ました寫眞を御守様と一しほに身につけて北支の山河を進みます。さうして東洋平和の爲働きます。(後略)

感心な銃後少年の英靈巡拜

「をばさん願ひ」と名も告げず英靈巡拜らしい牧野校の學童」といふ大きな見出

して昭和十四年六月二十一日某新聞に次の如き記事が掲載された。
最近名古屋市中村區米野町界限で戦死公報の入つた名譽の家を訪れて、「小母さんちよつと拜禮させて下さい。」と英靈の前に額づき香花を手向けて拜禮し、名も告げずに立去つて行く少年があり、感激した遺族達がこの少年を探してゐたが、右は同區米野町牧野裏一九ノ一笹島驛勤務長繩源七氏の長男で、松井石根大將を生んだ牧野校六年生一組隆俊君(一二)であることがわかり、その次第を伊藤校長のもとへ告げたので、同校長が調査の結果隆俊君は常に先生や父母から「お前達が愉快に學校へ通へるのは戦地で働く兵隊さん、殊に護國の神となられた名譽の戦死者の方々の尊い犠牲のお蔭ですよ。」と諭されてゐたので、子供心に護國の英靈に感謝したいと自發的に、南京城外で散つた同町出身太田重兵衛少尉はじめ各英靈に、感謝の拜禮行を續けてゐたものである事が判明、感激した同校長はさつそく廿日の朝禮で、全校生徒の前にこの美しい話をして長繩君を手本として兵隊さんに感謝の心を忘れぬやう、と教へ諭し、全校に感激の渦を巻き起してゐる。なほ長繩君はこのほか、同じ六年一組に席を置く金榮

泰、松尾信夫、吉村孝、吉村忠、河合利一、吉田定男、古山昭三の七君と語らつて、同君を中心に兵隊さんに感謝するグループを作り、先に行はれた衆議院議員選挙の際一日二十錢の某候補者のピラ撒きに雇はれ、八人の兒童がそれ／＼陸軍病院第二分院に傷病兵慰問に行つたり、戦地へ慰問袋を送つたりして、美しい行爲を續けてゐたもので、特に長繩君はその慰問にも子供らしい心遣ひを見せて、すべての人が花束や煙草などを持參するからと、廣小路の夜店で螢數十匹を買ひ集め、これを數個の螢籠に入れて陸軍病院第二分院を慰問したなどその立派な行爲は各方面の激賞を買つてゐる。

其の後もこの美しい行爲は繼續され、湖北省應山縣關帝廟附近に於て護國の華と散つた同町出身の宮田賢吾曹長の遺骨が宅に到着するや、學校の歸途、區葬が嚴修されるまで毎日心からなる感謝の參拜をなし、次ぎ次ぎに來る遺骨には、必ず家を訪問、英靈に心をこめて禮拜を捧げ、聽く人をして感激させてゐる。尙屢々笹島陸軍病院に雑誌・新聞等を持參して白衣の勇士を慰め、砲煙彈雨の戦線へは慰問袋・圖書・慰問文を送り、見

知らぬ兵隊さんと絶えず文通して銃後豆戦士の意氣を發揮してゐる。最近北支の一勇士より隆俊君への便りを紹介しよう。お元氣デ勉強、何ヨリデス。私モ元氣デス。オ送リン繪ハ大變上手ニ同書ケテマスネ、北支ハソノノ、涼シクナリマシタヨ、彈丸ノ下モクグリマシタガ、支其那ノタマナシカアタリマセンヨ、又次ニユツクリ、オタヨリ上ゲマセウ。隆俊君モオ便リ下サイ。オ元氣デ勉強ナサイ。オ友達ヘモヨロシク。父サン母サンヘモ。草々隆俊君は家にあつてはよき子優しき兄として、朝は早くから床を蹴つて某新聞社に行き、聯区内販賣店まで新聞を運び、登校するまでは母の臺所を手傳ひ、隆俊君が雑巾をかければ弟が庭を掃くといつたやうに、協同して家中を綺麗にし、兄弟仲よく「行つてきます」と元氣に揃つて學校へ出掛ける、學校の成績もよく、大人しい兒童である。この可憐な少年達の家庭に、突如不幸が起つた。それは、糧の力と頼む父が仕事で胸部を打ち、内出血をしたのが原因で、急性肺炎を併發し、家人の手厚い看護も空しく十二月二日午前二時遂に不歸の客となつたことである。噫、何と悲しい運命であらう。残

された母子三人は暫し途方に暮れたが、健氣な隆俊君は母の手をしつかと握つて、「お父さんが死んで淋しいが、戦地の兵隊さんの事を思へば何でもありません。今後はお父さんの代りに出来るだけ一生懸命に働き、しつかりと勉強して立派な人になり、お母さんに苦勞をかけません。」と力強く言ひ、につこりと笑つた。

一四、聾啞者の身で白衣勇士を慰問

千種區振甫町にある愛知縣立聾啞學校理髮科一年生(別科生)田中五三君(一九)は聾啞教育施設が世に知られてゐないためか、郷里渥美郡福江小學校で不十分な教育を受けてゐたが、昨年四月はじめて聾啞學校の理髮科へ別科生として入學した。

五三君の兄さんは、二人までも、目下大陸の野に轉戦してゐるが、五三君はこの二人の兄さんのことを思ひ、又學校での教へにより、不幸自分は耳が聞えぬばかりに第一線に立つて御奉公の出来ぬことを残念に思ふと共に、何とかして御國の爲に奉公は出来ぬ

ものかと、心をくだいてゐた。

同校生徒はもの言へぬ不自由な身でありながら、事變以來相勵まして陸軍墓地の清掃や、慰問状發送など、赤誠こめた銃後の務をしてゐた。然し五三君はこれに満足することなく、勇士の慰問に行きたいと受持の先生にせがんでゐたが、その願がかなつて、本年一月十五日の月曜日、今日こそは日頃習ひ覺えた業で慰問をしよう、と、理髪道具を風呂敷に包み、午前九時を待ちかねて、唯一人陸軍病院に出かけた。

病院では、始めは言葉が充分に通じないので、何だかわからなかつたが、さうとわかると、白衣の勇士達は、この赤誠こもつた未知の慰問客がうれしくてたまらず、不自由な體をベットの从上から起して、われも／＼と、田中君に理髪をしてもらひ、とう／＼夕方方の五時頃までに、二十餘勇士の斬髪をした。晝は勇士達の心づくしの洋食を御馳走になり、喜んで引あげて來た。そして學校で今日の愉快な模様を話すと、次の日曜日には僕も私もと、同級の黒川君、稻葉君、桑原君、高木さんの四人が加はつて、白衣の勇士を慰問し斬髪の奉仕をして來た。

以來今日まで、大體月二回あて、理髪の奉仕に出掛けて居るが、今では同校理髪科全員が成瀬先生と共に行つてゐる。その折には、白衣の勇士方は、非常によろこばれて、未だ少し早い方までも、我も我もと、この不具な少年達の赤誠に感じて、理髪を受けられるとの事である。

これといふのも、聾啞者の身ながら何とか御國の爲に御奉公する道はないかと、未だ腕も充分でない身を、唯溢れ出る真心によつて始めた田中君の赤心と、その聖業とに起因してゐるのである。

田中君は今、晝間は同校に學び、夜は昭和區の某理髪店に働き、苦學同様にして勉學にいそしんでゐる。

一五、長期戦下に綴る感激二重奏

一人息子を戦線に送り、健氣にも銃後を守る貧しい老母をめぐつて、長期戦下に綴る

感激の三重奏。

此の女主人公たる老母は、今事變勃發間もなく、一人息子の杉浦新吉一等兵を、〇〇部隊勇士として戦線に送つた、中村區若狹町二ノ一五杉浦ようさん(六〇)その人である。よるべもない老いた身に、柱とたのむ息子新吉さんを御國に捧げた後、雄々しくも生活を支へようと、日夜勤勞する健氣な心には、組合七戸は勿論、「若狹町勇士の母」として賞讃の的となつてゐる。

老いた身にこの血の出る様な生活記録が、ようさんから、「新吉どのへ」の軍事郵便として戦線に送られて行つた。其の手紙を戦線で讀んでいたく胸を打たれたのは新吉一等兵の上官―鈴木義雄軍曹(名古屋出身)だつた。

「新吉どのへ」の郵便を出して間もなく鈴木軍曹から、

見も知らぬ者から、突然の手紙でさぞ驚きのことゝ存じます。自分は、あなたの息子さんの新吉君のゐられる〇〇部隊の者です。任務の関係であなたのお手紙を見て泣かされました。自分は幸ひ、目下のところ留守宅のことは心配せず軍務に盡くすこ

との出来る幸福な立場にありますので、却つて失禮かと存じますが、同封のお金はせめてもの自分の志です。御生計の足しにでもして下さい。新吉君は元氣で軍務に精勵されてゐます。(原文の大略)

この手紙に金十圓が添へられて、ようさんのもとへ贈られてきた。ようさんは嬉し泣きに泣いて軍曹に心から感謝し、其の感謝にむくいるためにと健氣にも、「このお金は私すべきものではない。」といふので、其の半額を同町忠孝青少年少女日參團の基金にと差し出し、更に金二圓を郷社鹽釜神社に献納したのだつた。それから「かからした老母の眞心がどうして可愛らしい子供の小さな胸に響かずにはゐられよう。これこそ銃後の華」と人々を一層に感激させた。病身のようなさんは、かうした赤誠の持主なのに、不幸大腸カタルで病床に臥し、新吉一等兵の身を案じ、よるべない身の淋しさを感じつゝなほも新吉一等兵の事を偲んでゐた。そのわびしい枕頭に、温かい銃後隣人愛の手が再び伸べられた。

それは同町日参團團長をはじめ、在郷軍人班長小倉藤吉さん、犬飼龜三郎さん、三崎
 靱負さん、増田初一さん、小山庄市さん、久世ヒサさん、宇佐美トメさん等町内の銃後
 總動員で、「我等の勇士の母を守れ」と、毎日交代でようさんの看護に親身も及ばぬ涙ぐ
 ましい奉仕が續けられた。中でも宇佐美トメさんの家では、新吉一等兵と同時に二人・
 後一人・都合三人も出征してゐるが、「お互に勵ましあつて」といふので、病床のようさ
 んを力づけ手厚い看護を續けて居られる。川から、銃後から、注がれる愛の手に、ようさんは、泣けて、泣けて、
 と感謝しつつ、一方心を勵まし勵まし再びもとの體になるのを心に祈りつゝ、病床に病を養
 つてゐる。

そのようさんの枕邊で、看護奉仕の人々は「勇士の母を見殺しにしては、町の恥です
 よ、なあに私等は貧乏でも、どこまでもようさんを守らねば戦線の勇士に申しわけがな
 い、勇士に心配かけず守りますよ。」と、張りきつた銃後の意氣をはいてゐる。真心こも
 つた看護に、ようさんの病氣全快も間近の事であらう。

かくして銃後は互にしつかり結ばれ、新東亞建設のために邁進して行く。

一六、戦線銃後御奉公競べ

出征軍人遺家族から町の太陽とまでよろこばれてゐる義侠の齒科醫師は、中村區米野
 町七畝割三三の加藤信秋氏である。

氏は米野町十四區町總代、警防團救護部部长、方面委員、軍人遺家族世話係等をつと
 める名望家であるが、昨〇〇年〇月長子豊君を中支戦線に送つて勇士の家と呼ばれるこ
 とになると共に、氏の活躍も一層目覺ましく、その美談篤行は、枚擧に遑のない程であ
 る。今此に一端をあげると、

南部省三勇士が本事變に惜しくも戦病死を遂げ、未亡人は病弱の身に一家の柱石を失
 ひ、しかも省三勇士との間の戸籍問題が紛糾し、戦線からの便りと、區役所から受取つ
 た通知とが齟齬してゐた爲、愈々病弱な女の身には手に負へなくなつたのを見かねた加

藤氏は、銃後の務は此の時とばかり、約一ヶ月に亘り、或は司令部に、或は省三氏の本籍地三重縣に出かける等、東奔西走、暇と費用とを意に介せず、遂に戸籍問題を解決して未亡人に安住の地を與へたのであつた。

次は病勇士に對する美談。それは本年始め不幸病を得て兵役免除となつて歸郷した足立久雄勇士が、家計の都合上充分の療養をすることも出来ず、困憊してゐると聞いた加藤氏は、早速病勇士を知多郡豊濱町田中醫院に入院させ、入院費一切を自ら負擔し、尙毎月五圓宛の小遣錢を送金して、親身も及ばぬ親切を見せてゐる。

尙勇士の留守宅を護る神田さわさんが、産後の肥立ちが悪く、看護をする人手も無いと聞いた加藤氏は、深夜自ら大垣まで走つて、さわさんの母親を迎へ、療養費一切を負擔してさわさんの健康を取戻し、勇士の奮闘に報いた。

氏所有の貸家中、應召者のある家は家賃を全免し、他の家主に對しても出征軍人家族の家賃半減を交渉し、自ら残り半額を支出して、勇士に後顧の憂なからしめてゐる。

又本年正月、町内出動軍人遺家族全部を招待して伊勢參宮をさせ、七月にはやはり全

遺家族を招いて桑名赤地濱で立千網を催して慰安する等、全く至れり盡くせりの銃後鐵壁陣を布いて、第一線に奮闘中の子息豊氏と戦線銃後御奉公競べの意氣を以て活躍中である。

長期戦下氏の如き銃後戦士のあるは、町内の爲、否、皇國の爲、實に力強い限りといふべきである。

一七、學童の遺言でその貯金を献金

市内西區本重町四丁目一番地遠山兼松さん方は、長男秋雄、二男弘一の兩勇士を戰場に送つた名譽の家であるが、其の八男、園町小學校六年生守松君(二三)は此の春、病を得て四月二十六日遂に不歸の客となつた。臨終に當り、

「兄さんたちが戦地にあつても國に御奉公中死ぬのは申譯がない。せめては在學中貯金した金三圓五十六錢を、戦線の兵隊さんに上げて下さい。」

と遺言し、愛國行進曲を口誦みつゝ息を引取つた。同君の遺志を繼いで、父親兼松さんが某新聞社を訪れ、寄託献金の手續をとつたのは、それから間もない日のことであつた。七月五日附で〇〇部隊長から懇な感謝状が送られてきた。翌日これが學校に齎されたのであつたが、先生や學友たちをどんなに感動せしめたかは、あらためて言ふまでもない事である。

一八、不幸な五兒を身に代へて養育

昭和區彌富町西屋敷陸軍工兵上等兵竹下傳造君に昨年〇月名譽の召集令が下つた。竹下上等兵は妻女もとさん始め四男一女を残して、勇躍〇〇原隊に向け出發した。もとさんは健氣にも五兒と共に武人の妻としてかひなく留守宅を護つてゐたが、その後間もなく、かりそめの病がもとで病床に呻吟する身となつてしまつた。近親の人々は、血肉を削つて眞剣な看護をしたが、何の効もなく病勢は高まる一方であつた。もとさんは

お國のために御奉公中の夫に心配をかけては……と、自分の病狀を夫に知らせる事をこばみつゝけたが、見るに見かねた人達はひそかに昭和區長を通じて竹下上等兵の所屬部隊長に此旨を願ひ出たので、特に歸休を許され上等兵ははるく歸名して病妻の看病に努め、再び〇〇に歸つて行つた。もとさんはその後依然重態をつゞけ、二月三日愛兒に心を残しつゝ淋しく死んで行つた。兩親の愛撫を失つた五兒は、見るもあはれであつた。

當時市内東區富士塚町松坂屋専屬裁縫所で修業中であつた故もとさんの實妹河合ひさゑ(二二)さんは、優しい乙女心から身を以て五兒の世話を引受けた。ひさゑさんの愛情に蘇つた五兒は、暗夜に光明を見出した如く、元氣な子供になつたが、ひさゑさんの實家では修業を途中ですてさせることについて、少なからず心を痛めた。しかしひさゑさんの決心は固く、

「氣の毒な五人の子供を捨てることがどうして出来ませうか。私の將來など問題ではありません。お國のために働いてゐる義兄に心配させない事は私の義務であり、又銃後の御奉公です。義兄が芽出度く凱旋するまで立派に留守を守ります。」

と云つて、喜んで献身的な努力を續けるのであつた。或時、此の事がどこからか誤り傳へられ、御器所の某老女が匿名で金十圓を贈つたが、「このお金はお受けすべき筋合ではない、しかし突返せば篤志家の厚意に反するから……」と、そのまま国防費の一端にと献金した事もあつた。

ひさゑさんを訪へば、（中略）私などよりもつとゞ大きな御奉公をしておいでになる方が澤山あります。私はたゞ當然の事をしてゐるに過ぎないので、おほめにあづかると却つて恥しい位です。（中略）

とつゞまじやかに語つた。（中略）一九、銃後の華、娘理髮師（中略）

昭和十年の春四月、中區松元町二丁目の中島理髮店へ、小柄な眼のバツチリした娘が

弟子入をした。名前は且木たね子年はやつと十七の春を迎へたばかり。しかし、こまめに立ち働くので、店主新祐さんも目をかけて指導した。お蔭で技術に學科にぐんぐん成績をあげ、入店後一年餘りで理髮試験に見事パスしてしまつた。

其の後、たね子さんは主家へのお禮奉公も終り、親の意見もあつて愈々希望の獨立開業を店主に語り、なにくれと準備をしてゐた矢先、今事變の勃發を見たのである。そして間もなく〇〇年〇月には店主中島新祐氏も召され、老兩親妻子六人の家族を後に残して〇〇聯隊に入隊、中支に勇躍出征することゝなつた。大黒柱を失つた一家の窮狀を見たたね子さんは、他年の宿望であつた獨立開業を思ひ切り

「私達は前線に出る事は出来ませんが、せめて貴方の御還りまで、此店で働きます。後の事は御心配なく立派なお手柄をお立て下さい。」と中島氏に誓つたのである。

それから今日まで、一家六人の人達を護り、女の細腕一本で働き續けて來たのである。昨年正月七日門前署で開かれた管内理髮組合總會の席上で、この善行に對して螺澤署長

から名譽の表彰狀並に金一封を授與され、銃後婦人の龜鑑と激賞された。

「軍國女床屋」(町内の中島理髮店への愛稱である)を訪れると、公休日でもないのに鯨幕を張り休業中、刺を通じると中島氏の兩親はじめ出て来て「今日新祐が名驛を通過して無事歸還したので……」と喜びながら、たね子さんを指さして「これのおかげでな……」と老父新七(六五)さんは嬉し涙にむせぶのであつた。新祐氏は出征中軍の編成替から〇〇聯隊付となり後顧の憂なく武勳赫々原隊に歸還されたのである。

晴れの歸郷も近いうちであらう。

二〇、貯金と廢物報國

勇猛果敢な皇軍將士の力闘に加へて、舉國一致の總力を以て東亞新秩序の建設に邁進しつつある折柄、率先陣頭に立ち貯金と廢物報國とに、目覺ましい活動をなす健氣にもうるはしい銃後の美談がある。

この美談の主人公である安藤さださんは、社會教育家として有名な安藤秋三郎氏の夫人で、東區白壁聯區の人々から銃後の母として尊敬されてゐるが、夫人は「長期戦下に於ける銃後の護は主婦の手で」と本年二月に町の婦人會で「捻り出し貯金」を提唱し、貯金報國の申合せとなつた。さて實行となると、なか／＼はかどらなかつたので、膝詰談判式に時局の重大性を説いて廻り、各戸に貯金箱を配つて主婦の心がけからひねり出したわづかなお金を蓄めて、毎月一回赤塚郵便局から局員が出張し、貯金通牒に記入する事にしたのであるが、百五十戸ほどの町内で、毎月二百數十圓のお金がお國のお役に立つてゐる。今日では斷然他の町を壓倒して、實に素晴らしい成績を擧げてゐる。

また夫人は非常に情深く、出征遺家族のうちで不幸な人があれば、我が事のやうに心を痛めて衣食住はもとより、心の友としてなくさめてゐる。夫人をたづねると、

「愛國婦人會で年に二回區内の各家庭から婦人の抜け毛を集めて、之を問屋に賣却して會の事業費に充てゝゐるが、今日も七貫餘の抜け毛を問屋に持つて行き、十圓五十錢貰つて來ましたところですよ。」

と、油に汚れた手を拭ひながら、

「今日の戦争は支那だけが相手では御座いません、世界を相手の大戦争ですもの、第一線で御苦勞願つてゐる皇軍將士と同じ氣持で私達も銃後の護りを固めねばならぬと存じます。男の方は夫々生産方面に御活動願はねばなりませんから、出征軍人の遺家族や、お國の爲に一身を捧げてお盡くし下さる方々の御世話だけでも、我達の手でやつて行きたいと存じますが、微力な私達の事ですからお役に立つやうな働きも出来ません。」と慎ましげに語つてゐた。

二一、銃後を護る模範遺家族世話係

名古屋市南區道德新町二丁目三一五一の山田錠太郎氏は昭和十四年十月五日軍事援護についての働きが格別立派であるとして、愛知縣知事より縣下六人中の第一に擧げられ表彰を受けた。

この山田さんの出生地は、中島郡大里村であるが、郷里に於て村會議員・消防組頭・衛生組合長・或は區長等を務めた名望家である。後、愛知縣巡查を拜命して在職十二年職を退いて現在の所に居をかまへ今日に至つてゐる。

現に町總代・氏子總代・社會教育委員・銃後奉公會常任理事・軍人世話係代表等多數の公職に携はり、全く自己を忘れて社會教化の爲め努力してゐる。

特に昭和十二年七月、支那事變勃發するや、晝夜の別なく出動軍人や遺家族の爲め努められた事は、全く感激のほかない。

齡七十といふのに壯者を凌ぐ元氣で、日に幾回となく區役所へ、警察へ、神宮へ、氏神様へ、應召者宅へと駆け廻はり、昨日はこの道を七遍往復したが等と語つてゐる。

極めて實直な人で、書類等もそれ／＼整然と區別し、何時何れからの質問にも即答し得る様なつてゐるのは勿論、即時即決主義をとり、決して次の機會にまはすといふ事はなく、話を聞けばすぐそれを始末するといふ人で、よくあゝまで出来る人と人々を感激せしめてゐる。

軍事扶助法とか、出勤者支援の施設が完備するや、此の恩恵に一日も早く浴せしめる様にとの心盡くしから、出勤者の家族を見舞ひ、病人が出たと聞けば、暑さ寒さも厭はず、晝夜のかまひもなく、區役所に赴き診療券の世話をしつたり、或は直接病人を醫師のもとへ連行するなど唯々感歎の外なき活動振を示してゐる。

殊に昭和〇〇年〇月〇日、召集令狀が日清紡績會社宅、某氏方へ下つた際の如き、折から妊娠臨月だつた某氏の妻君は、俄かに産氣づいて女兒を分娩、嬰兒には異狀なかつたが産婦は遂に死亡してしまつた。本人は入隊の準備もせねばならず、茫然自失の状態にあるとの悲報を耳にするや、午後十一時過ぎといふのに即時區役所に出頭、夜中ながら夫々手配し、翌早朝區吏員と共に應召者宅を訪問、手當萬端滞りなくすまし、香料を佛前に、葬儀の準備に努める一方應召出發の準備、並に遺兒遺家族の始末等、一切の世話を一手に引受けてするのであつた。

其他、戦病死者の家族間に何か論争の起つたとき等も調停の勞をとつたり、遺家族等の爲め授産事業を計畫したり、百方直接指導の任にあたる等、常人の企て及ばぬ程、

銃後の護りを全うしつゝある模範的態度といふべきである。

二二、純眞な老漁夫の赤誠

中川區下一色町の町總代犬飼諒一さん宅を夜遅く訪れた老漁夫が、

「今日晝間、皆様からの有難いお勧めによりまして軍事扶助をお頼み申しましたけれど、勝手に申しまして相済みませんが、あらためてお断り下さいませんか。」

と軍事扶助の手續方を断つた。この老漁夫こそ、同町字成亥島一ノ九に住む犬飼千代吉さんと言ふ感心な人である。千代吉さんの長男庄三郎さんは今次事變に逸早く應召し、〇〇部隊の特務兵として出征した。残るは老父母と弟妹で、以前から父親千代吉さんは病弱、それに庄三郎さんの妹とみ子さんは三年來の長わづらひで、千代吉さんの家計はその日その日の生活にも窮してゐる程の貧困さである。近隣の人々はこの状態を見るに忍びず、「千代吉さん、お上へ軍事扶助をお願ひしてはどうだね。」と親切に勧めるので

あるが、その都度「皆さんの御親切は有難いが、折角、倅も御國の爲めに御奉公させて貰つてゐるのです、これ位の事でお上に御手数かけては、お國に相濟まぬことだし、倅に對しても申譯のないことですから。」と、どうしても聽かなかつた。日毎に家計は苦しくなる一方だ。「千代吉さんは感心なお人だ。」と、賞讃の聲は街に満ちあふれた。だがその窮状は極致に達してゐるので、町總代や世話係の人々が相談したあげく、再三勸めて遂にその手續を取る事を千代吉さんに承諾させたのがその日の晝間である。

「お前さんの健氣な心は、若者も及ばぬ立派なものだ。町では誰一人感心せぬ者は無いが、今の暮しでは、とてもお氣毒だ、それで皆さんと計つて少しでも生活が樂になる様にと思つてやつときめたのに、これはまたどうした事だね。」

と諒一さんは尋ねた。千代吉さんは涙の中に如何にも堅い決心をみせて、

「今晚、家のとみ子が支那事變の忠勇美談物語を讀んで聞かせてくれました。家中のものが深く感激させられました。戦地の兵隊さんの御苦勞思へば、私共位の苦しさはなんでもなくなりました。老の細腕ですが、何とか家中の者が頑張つて、倅の晴の凱旋を

迎へてやりたいと思ひます。お國では一錢のお金も大切な時と聞いてゐますから、軍事扶助を頂くことをお断り申す次第です。」

と述べた。文字通りの赤誠をまのあたりに見た諒一さんは純真なこの誠心こそ、日本の持つ尊い寶であり力であると深く感動せずにはゐられなかつた。この美談が、街から街へと傳はつた。「私も千代吉さんの様な元氣で。」と多くの人々を力附けたにちがひない。

二二三、勇士の家を守る二小店員

名譽の應召主人を「店はこのまゝにして置いて下さい。決して御心配はかけません。どうかしつかりやつて來て下さい。」と勇ましく勵まして送り出し、後に残つた女主人を助けて主家を守りつけ、町内のほめ者となつてゐる二小店員がある。それは、千種區覺王山通六ノ三、桶商野々山進さん方の澤田武(一七)野々山六美(一六)兩君である。

主人進さんは、昭和〇〇年〇月、〇〇部隊に属して出征した。それ以来澤田、野々山の両君は、二歳と四歳の二人の子を抱へた女主人よしさんを助け仕事にはげみ、注文から製造まで一切を引受けて働いた。両君の赤心を見た近所の人達は、唯々感心する外なかつたが、この一家の有様を見るに見かねた同町總代山田久太郎さんは、よしさんに對し再三軍事扶助を受けるやうにとすゝめた。よしさんは、「二人が一生懸命にやつてくれますから」と、そのすゝめを受けないで健氣な心を示して居た。同家で夜遅くまでも桶作りに働んで居る澤田君は、

「御主人のあとを引受けてから、なか／＼忙しく、夜業などしておそくなりますと、おかみさんが無理をしないやうにとおつしやつて下さいますが、私達の作った品の賣れていく時の嬉しさや、戦地にみえる御主人のことを思ふと、勵みがついて毎日元氣に仕事が出来ます。」と、元氣に言つて働いて居た。大抵進さんは、

最近、進さんは二ヶ年餘の戦線を無事につとめて歸還した。同家に行つて進さんの話

を聞くと、

「武ですか。あれには何といつてよいか、唯感謝の外言葉はありません。私は出征の時、この小店員ばかり残しては、とてもやれまいと思つて、店をたゝんで行くつもりでした。ところが「何大丈夫です、私達が引受けました。」と言つてくれたので、そのままにして出征しました。幸、近所に伯父が居ましたので、それに聞いてやつてくれよつて、氣の毒なくらゐ働いてくれたことも知りました。考へてみますと、武は不幸な少年です。僅か三歳の時、他家に養はれ間もなく養父には死別し、養母と二人で轉々と歩き廻り、教育も充分に受けられぬ有様でした。私の家へ來たのは、六年生の時でしたので、家から學校へ通はせましたが、なか／＼優秀な成績でした。私の感心したのは、陰、陽のないことです。私も随分多くの職人を知つてゐますが、彼くらゐ立派な心掛けの者を見たことがありません。私の居ない時程一心に働んでくれます。私として最も感激にたへないことは、私の出征中、五日おきに必ず便りをくれて、家の

仕事賣上げから、近所の有様など細いことまで通知し決して心配なことなど書かず、私を勵ましてくれたことです。私は戦地に居ながら、家の様子をあり／＼と知ることが出来、どれ程安心して戦へたことか。それに、もう一つ、毎朝八幡様に祈願してくれてゐたことです。更に武につき感心なことがあります。それは三歳から養つてくれた養母に孝行なことです。養母といふ人は私達からみますと、一寸むりな考へをもつて見えるのではないかと思はれる人ですが、決して育てられた恩を忘れず、真心こめた孝行をつくし、養母の言には絶対にさからはぬといふ、實に立派な孝子です。現在の私としては何とかして頭のよい武を教育し、一人前に生活の出来得るやうにして少しなりとも彼の真心に報いてやりたいと考へてゐます。」と涙をうかべて感激そのものゝやうに語つた。銃後を護る青年の美談と稱すべきである。

二四、部隊長感激の軍國三兄妹

徳男君、町子さん、匡雄君も手紙とキャラメルをドツサリ有難う、生意氣な敵を散々やつつけて歸つてきたところへ、君達からの慰問品だったので、一同大喜び、口髭をモグ／＼させながら頂戴した。聞けば君達三兄妹が小遣を貯めて送つてくれたキャラメルとのこと、先日のタバコといひ今度のキャラメルといひ、兵隊一同は本當に有難く思つてゐる。一同に代つて厚くお禮申します。

〇〇にて 〇〇部隊長

勇猛〇〇部隊長をかく感激せしめた三兄妹は、中區門前町小島瞭太郎さんの長男徳男君長女町子さん二男匡雄君の三人である。この幼い三兄妹が、かうした床しい贈物をするやうになつた動機はニュース映畫にある。ある夜ニュース映畫に出た一場面に、皇軍勇士が一本の煙草を分けあつて吸ふところがあつた。三つの童心はこれに吸ひつけられ戦線の將士の勞苦に涙し、何とかして慰めたいと心のスクラムを組むことになつた次第

である。士は、さきにはバット百個、次でキャラメル四百個、更に又何かをと其の後も絶えず小遣錢を使はずに貯金をつゞけてゐるといふ。かうした慰問を受けてこそ、皇軍將士は喜んで野に臥し山に寝ね、只管御稜威發揚の爲に身命を堵することが出来るのである。○二五、少女の赤心孤獨の勇士を勵ます

事變勃發以來日夜皇軍將士を滿載した列車が名驛を通過する。昭和〇〇年〇月の事、當時共立小學校の四年生であつた小島美智子さんは、西區少女會の一員として通過部隊の歡送に加はつた。可愛い美智子さんは、感激の小旗を打振り萬歳を叫びながら、列車の窓から一勇士の手に小旗と名刺とを渡して激勵した。勇士は「有難う、有難う」と受取つた名刺を見る

と、偶然にも自分と同じ小島姓であるので懐しく思ひ、自分の名刺を美智子さんに與へ元氣で戦線へ發つたのであつた。美智子さんは、名古屋驛の見送り有難う、自分は早くから兩親を失ひ身よりのない身で、美智子さんが妹のやうな氣がする。と便りがあつた。美智子さんも大變喜んでそれから後作文や日記や家族の寫眞等を送つて孤獨な小島勇士を勵ましてゐた。美智子さんの赤心は、かうした事だけで満足せず、自分の名を隠して毎日々々新聞を送り續けた。戦線で新聞は心の糧、小島勇士の喜びは如何ばかり、この有難い心盡くしは何人であらう、何んとかして御禮を言ひ度いものと苦心してゐた。勇士から依頼を受けた某新聞社の調査により、終にこれがいけな美智子さんの隠れた赤心の發露であることがわかつた。同勇士は心から感激して、私はもとより生還を期してゐないが、萬一武運めでたく再び名古屋驛を通過することが出来たならば、必ず下車して御禮を申上げたい。あなたの温い心は本當の妹のやうな氣がしてならない。と、禮狀を送つて來た。

かくて今日まで二年有半、勇士を勵ます健氣な美智子さんの行爲は繼續され、勇士からは生家と慕はれ、妹と懐かしまれ、銃後美談の華と謳はれ、興亞の貴い聖業に少女の意氣を示してゐる。

名古屋市熱田區西町幣懸七吉田よね子さん(二七)の夫茂一郎上等兵は、一昨秋北支に

出征した。あとに残つたのは老母と、長男長女の女子供ばかり、よねさんは「一家を支へるのは自分だ。」と夫の元の勤め先、名古屋工廠へ通つてゐるが、よねさんにとつて悲しい事は、一家が無事に暮らしてゐてもその有様を夫に知らせる手紙が書けないことであつた。「字を知らないこの悲しみ、今から習つても習へないことはあるまい。」とよねさんは旗屋小學校の夜間特別學級へ入學を決心して願ひ出たところ、理解ある學校側の特別な計らひで、この四月から四年生入學を許された。晝間通學のできない十二

三歳の少年少女二十餘名と机をならべ、戦地の夫に手紙が書けるやうになるのを楽しみに一日も缺かさず夜七時から九時まで一心不亂の勉強をつゞけた。朝は四時に起きて針仕事、炊事などの家事をすませ、六時半には工場へ、退勤は夜七時になるので、家へ歸らず其のまま學校へ行つて勉強し、歸宅してから夕食の後其の日のおさらへをするといふ熱心さに、擔任の先生も其のけなげな精神に感心して「立派な方です。成績も組で一番です。」とほめて居る。よねさんのいふのには「郷里が鹿兒島縣の山奥で、小學校をいゝ加減にすませたので、字も満足に書けないといふ情なさですから、先生のお力に絶つて通學してゐます。拙いながらも自分の手で手紙が書けたら、戦地に居る夫もどんなに喜ぶことでせう。」としみじみ語つてゐた。これこそ軍國が生んだ銃後女性の鑑といふべきである。

二七、良縁も顧みず留守宅を護つた一女性

中支の聖戦へ勇躍出征して行つた兄の留守宅を護り、自分の良縁も顧みず老いた母と

産褥の嫂とを援けて、孜々として一家の生活を支へてゐる健氣な娘さんの銃後美談。

其の主人公は名古屋市中村區運河通四ノ一六青物商松崎謹治上等兵の妹すえのさんである。

松崎上等兵は、昨年〇月〇〇部隊に屬し、中支の戦線に征つたが、出發に際し老母よねさん(六五)と懐妊中の妻うめさん(二八)の身を案じてゐたところ、妹すえのさん(二五)が「一家のことは一切私が引き受けますから、兄さんは安心して御國の爲に働いて下さい。」と力強く勵ましたので勇士も安心して出征する事が出來た。

すえのさんは、昨年六月まで豊田紡績に勤めてゐたが、良縁とゝのつて退職し、嫁入りする日を楽しみにしてゐたところへ兄の出征となつたもので、折角の芽出度も一時見合はせて、兄に代つて一家の生計を支へることになつた。朝は四時に起き、リヤカーを輓いて中央市場へ買出しに行き、歸るとすぐ、得意廻りから配達まで、骨身を碎いて働いた。その努力が報いられて、一時は閉鎖しようとした店も今では従前にも増して繁昌、五月には嫂が長女初代ちゃんを産み、母子とも健在、戦地の勇士は重なる吉報を

聞くにつけ、これといふのも肉親とはいへ自分の身を犠牲にして一家の爲に献身する妹の真心のお蔭と感泣し、誓つて皇國の爲奮闘する決意を示して、常に第一線で赫々たる武勳を樹て、妹さんには感謝の便りをよせてゐた。すえのさんは「お國の爲ですもの、こんなことは當然のことです。私達が元氣でやつてゐると兄に知らせるたびに、兄から殊勳を樹て、元氣で活躍してゐるといふ便りがきます。嫂もそれを何よりの楽しみにしてゐます。」と。

このすえのさんの健氣な真心が神に通じたか、松崎上等兵は赫々の武勳を樹て、歸還したのであつた。すえのさんは其後も兄を助けて家業を護り、留守中の家業に關する一切を兄に引繼いで後は、かねて中央市場で顔を合せて知合つた露橋町の出征軍人の留守を護る八百屋さん宅へ出かけ、「私の兄は目出度く歸還しましたので、これからは貴女の店を手傳ひませう。」と麗しい同情を寄せ、無報酬で其の八百屋さんに合力、自分の店と同様全力を盡くしたのであつた。其後、露橋の店の加盟してゐる砂糖同業組合は、此の美談の主を世に現はさではと、表彰方を申し出たのであつたが、すえのさんは「こ

れしきのことにして表彰など受けられませうか、只私は兄の留守を守つた心で同業の手傳ひをしたのみです。」と固辭して受けなかつた。

すえのさんは又孝心深く、本會から往訪の際も、暇を得て老母を伴ひ京都本願寺参りに出掛けて不在であつた。兄の松崎上等兵は「身内をほめるのも何ですが、本當によくつとめてくれました。」としみじく語つた。銃後に咲ける大和撫子の花一輪、色香も美しき物語である。

二八、贈る日章旗に軍國少年の魂宿る

一昨年の秋、歡呼の聲と旗の波に包まれた特別列車が、今しも〇〇驛のホームを離れようとする時、日参團の一少年から千人力の日章旗を贈られて感激したさる中尉があつた。立錐の餘地もない見送り人の混雑に、少年の住所氏名を尋ねることも出来ず、心ならずも出發してしまつたのであつたが、其夜大阪に宿營した中尉は、贈られた日章旗を

出して感激を新たにしてみた際、はからずも一隅に記された少年の名前を發見し、直ちに禮狀を差出した。

此の日章旗を贈つた少年こそ、米野小學校高二の太田政明君であつた。同君は事變勃發後、間もなく日参團を組織し（現在米野平池十三區日参團）朝夕團員三十餘名を引率して日参するほか、名驛通過の出征勇士の歡送を續けてゐたもので、千人力の日章旗もかうした同君の心からなる贈物であつた。

其後、中尉からの禮狀を受取つた同君は、其の所屬部隊を知り、慰問文を送つて勇士を勵まし、一方學業の餘暇に新聞を配達して得たなにかの金を以て慰問袋を贈り、天晴れ銃後の少年戦士振りを發揮してゐたが、それらのことは面にも出さず、黙々として繼續してゐたのであつた。ところが、本年七月〇〇部隊山崎吉次中尉から米野小學校に宛て、「太田君から贈られた日章旗こそ軍國日本の力強い少年魂がこもつた贈物であるから、各地の激戦にこれを押樹て、奮戦、赫々の武勳を顯はし、現在は警備隊本部の屋上に翻翻とはためかしてある。」と感謝の意をこめ、「どうか太田君を賞揚ありたし。」

との便りがあつたので始めて學校當局の知る所となり、同君の如き篤行者を出すは學校の名譽なりと、全校兒童の前で之を表彰したのであつた。尙學校について話を伺へば、同君は級中でも模範生とのこと、かゝる少年が續出してこそ戦線の勇士も大いに勵まされ、興亞の光も益々輝かされることが出来るであらう。

二九、留守を護る雄々しき妻女

夫と弟とを戦場に送り出し、雄々しくも留守を護る健氣な軍國の婦人、市内西區稻生町新屋敷一五五〇番地土屋とみゑさん(二三)は、一昨年〇月〇〇日夫仙優氏が上海派遣〇〇部隊の一等兵として出征するのを見送り同月〇〇〇日續いて弟正勝氏を中支に特務兵として送つた。一家生計の杖柱とも頼むべき二人の男手を失つたとみゑさんは、少しも屈せず、「私も銃後の女性です、夫の出征中はきつと一家を護つて見せます。」と堅く心に誓ひ、父仙太郎氏(五九)を援け、長男秀雄さん(三つ)を抱いて、出でては名古屋工廠

の女工として通勤、朝は未明から慣れぬ職場で男さへも至難な晝夜交替の激務に従事し、入つては一家の主婦として寢食を忘れ、父への孝養子供の養育に懸命の努力を拂ひ、戦地の夫には家計の苦勞を知らせぬやう、雄々しくも一家を守る大活躍に附近の人々の稱讚の的となつてゐる。

三〇、硝煙下慰めの新聞

赫々たる武勳に包まれて本年〇月歸還した〇〇〇〇部隊長は、轉戦一年有半の陣中で最も深い感動をうけたある勇士の妻に對し、感謝の言葉を洩した。それは、同部隊が上海戦から南京、徐州戦をへて、武漢攻略戦へ征野幾百里を進撃した間、郷土の新聞が一日分も欠けることなくきつと部隊の後を追つて届けられ、部隊將兵の大きな慰安となつたことであつた。感動した部隊長が事情を調査してみると、同部隊の八木達夫勇士の妻が、夫のもとに缺

かさず送ってくるのを同勇士は先づ部隊長に見せてから戦友と一しよに妻の心づくしを味はひ読んでゐたものとわかつた。胸をうたれた部隊長は同女に感謝の手紙を送つたのであつた。

八木達夫勇士留守宅は中區西裏町二丁目三十七番地で、感謝の主のさかえさん(二五)は一昨年夏、夫を聖戦に送り出してからも家業の箔巻屋を營んで、しつかり銃後を守つてゐる。出征前までは手広く卸賣りをしてゐたが、今はそれもならず、時々たづねる妹や弟の手助けをかり、夫の武運長久を祈りつゝ細々と家業をつゞけてゐるのである。同町總代林氏も、蔭になり陽になりこの家を護つて力づけてゐる。新聞は今もなほ夫の後を追ひ、たとひ後方連絡の都合上、多少遅れることはあらうとも、漢口の北應山から二十里の山奥までも妻の真心を運んでゐるといふことだ。

同家を訪うてけなげな同女の奮闘振りをまのあたりに見ては、自ら頭が下るのを覺え勇士の武運長久と家業の繁榮とを心ひそかに祈るのであつた。

遺品のフィルム焼付けて伴の部下の遺族へ贈る

一昨年〇月〇日名譽の出征以來、膺懲の戈をとつて既に三星霜、其の間、各所の聖戦に赫々たる武勳をたて鬼隊長の名を轟かしてゐたが、武運つたなく本年〇月〇日〇〇西北方十二軒〇〇廟で何十倍の敵を相手どつて要衝を守り続け、七度生れて護國の鬼となる。』の悲壯な言葉を残して壯烈な戦死を遂げた〇〇部隊梶田誠大尉(三〇)の英魂を想へば銃後の涙も更に新しいものがある。

故梶田大尉の兩親昭和區吹上町一ノ五五の梶田鏖藏氏(五七)、さとさん(五〇)は、故大尉が生前陣中の餘暇に部下と共に撮つた遺品のフィルムを一々焼付けては舊部下の遺族達に記念として送り、或は直接訪問して遺族を慰め「伴の魂、今ぞ安らかなれ。」と祈つて居る。老いの身に天晴れ部隊長の父母よと軍國日本の莊嚴な氣高い姿を感じる次第である。

美談の主、梶田鏖藏氏を訪へば「何しろ伴誠から送つて來た寫眞の原板だけでも四千

枚もありませんので、其の焼付けだけでも五百圓程を要しました。今までにもう三千五百枚餘り、誠の部下遺族の方々にお送りしましたが、併しこんな事は舊部下の勇士の方々の御苦勞を思へば、當然の事です。」と故大尉の形見の寫眞を六冊のアルバムに納められた前で、謹嚴な態度で語られた。宜なるかな、此の父母にして此の子あり、故誠大尉は本年十月十六日、〇〇に於ける拔群の功により、功五級旭日六等の恩命に浴したのである。地下の故大尉の英靈も定めし感涙にむせんでゐることであらう。

三二、戦線銃後主従美談

市内西區柳町扇子製造業杉山正一氏は軍籍のない自分が銃後の勤めとして何か國家社會の爲に奉仕したいといふ一念から、親戚のない不幸な者を世話して正道に導かうと決心し、和光寮から中田義賢君外三名を引受けて、熱心に教育し、和光寮からも感謝された人格者である。

かかる中にも中田義賢君は、一昨年の秋、名譽の召集を受けて杉山家から勇躍首途、

〇〇部隊に屬して目下中支方面に活躍してゐる。

町内でも、この主従の美しい關係に感激し、同町の河合恭二氏、丹羽鷹一氏等が率先して日參團を組織し、出征勇士の武運長久を祈つてゐる。

この程、戦地の中田君から、日參團の少年少女の爲に金一圓、又主人杉山氏へ日頃の御教訓を守つてためたといつて五十圓、謝恩の送金をして來た。杉山氏も何度も手紙を讀み返して、中田君のこのいぢらしい心に眼をうるませた。杉山氏は語る

「賞めて戴くほどのことではありません、私もあれの事を思ひ、あれも亦私の事を思つてくれますし、こんないぢらしい手紙をくれてほんとに泣かされます。」

主従の眞心が一つに溶け合ふ戦線銃後美談の一つである。

三三、この勇士にしてこの妻女あり

聖戦に参加して彈丸雨飛の中を馳驅する勇士が敵弾に傷いた日、奇しくも日を同じう

して愛兒が死に旅立つた悲話がある。白衣の勇士は市内港區港本町三丁目五地天白龍一上等兵其の人で、昨年〇月勇躍應召、中支に興亞建設の戈を執つてゐたが、昨年十一月二十一日地州附近の激戦で不幸右下顎部に敵手榴彈を受け、後送の身となつた。

一方、留守宅でも長女なみさん(一〇)が僅か五日間の病臥で不幸にも夭折した。丁度其の頃、天白氏は南京から上海を経て小倉へと白衣の身を轉送されて來たのである。妻女たづえさん(三二)は重なる不幸にも心屈せず、同町吉川町總代を通じて小倉病院後藤班長宛、娘の死を知らさぬ様、さうして一日も早く全治の上は再び前線に出動させて戴くやう激勵方を依頼したのであつた。

其の後、同勇士は京都陸軍病院へ送られて來て、こゝで初めて娘の病死を知り、外出の一日を割いて懐しの我が家へ歸つたが、悲しみの色さへ見せず、却つて家内の者を勵まし、墓參の上、次の戦には必ず殊勳を樹てることを誓つて歸營した。此の話を遠く戦地で聞き知つた部隊長からは感激の手紙に添へて佛前へと金一封を送つて來た。此の勇士にして此の妻あり、たづえさんは夫の全快の一日も早からんことを祈りつゝ、残る二

兒を抱いて刻苦精勵、家業の玩具商に餘念もない。やがて、同家にも漸く一陽來福の喜びが溢れることであらう。

三四、點字に示す誠の結晶

漢口陥落の祝賀で全日本を舉げて沸き返つてゐる時、陸軍省恤兵部を感動せしめた盲目少年の美舉、それは中區古澤町名古屋盲人技術學校鍼按科二年生の長谷川正昭である。長谷川君は盲目の身故國家の干城となつて、國の爲に盡くすことの出來ないのを殘念に思ひ、かねて武漢三鎮陥落の日を、指折り數へつゝ毎日一錢づつを貯へた金に、不用品を賣つて得た金を合はせた二圓十一錢を、次の如き熱誠あふれる點字の手紙に添へて差出したのである。

忠勇なるわが皇軍將兵の皆様が、君のため御國のため御働さ下され、遂に廣東を占領、更に漢口を陥落させて下さいましたことを、ラヂオニュースで聽き、只今心から深く

感激の他はありません。これはほんの僅少ですが、私が本年海軍記念日より、本日の如きニュースを聴く日は何日かと楽しみにしながら、毎日一錢づつ貯へたものと、その他不用品を賣つたお金とを合はせて、二圓十一錢になりました、どうかこのお金を恤兵金の一部になりともお加へ下さい。

なほ同君はじめ、同校生徒一同は夏休を利用して、出征軍人遺家族慰問治療その他に盲目の身をも銃後の一役に盡くさうと、懸命の努力をしてゐるとの事、曩の聾啞生の理髪的美舉と共に聞くも涙ぐましい銃後の一美談ではないか。

三五、銃後は完し、リヤカーひく國婦組長

千種區千種通り五ノ一、吹附馨青年は、評判の孝行息子で、十一歳の頃父兼松さんを亡くしてから、病身の母よしさん（五六）をいたはつて、さゝやかな青物商を営んでゐた。ところが本年一月あつばれ國家の干城として歩兵第六聯隊に入營した。入營して行

く身に、唯心に残るのは老母と商賣とのことであつた。

ところが、或日隣家の呉服商をやつてゐる、大久手國防婦人會第二班群長、國原イツさん（四六）から便りがあつた。それには、

「馨さん、お母さんと商賣との事は決して心配して下さるな。丁度隣に住み合せた私が入受けました。安心して軍務におはげみ下さい。」と書いてあつた。

其の後外出を許された時、家へ歸つて見ると、隣家の小母さんは、馨君の入營した翌日から、雨の日も、風の日も、一日の休みもなく、朝六時には青物市場へリヤカーを引いて駆けつけ、お母さんが買出される青物類を積んで歸り、青物を店頭にならべて、商賣の手助けをするばかりか、暇さへあれば、お母さんの面倒を見てゐて下さることがわかつた。同君は感涙にむせんで歸營し、大いに奉公の心をはげました。

イツさんは、其後も白エプロン姿もかひなく、この勇士の家の爲に尊い奉仕をつとけてゐるので、青物市場へ來る人は勿論、近所の人々も、この立派な行に心から感心

してゐる。「こんなことは、隣に住む者としてあたり前のことです。別に感心していただく程のことではありません。馨さんの無事凱旋されるまで手傳はせて頂くつもりです。」

とイツさんは語つてゐる。尙老母よしさんは、「ほんたうに大助りです。いろ／＼御迷惑をかけ、何ともお禮の申しやうも御座いません。今は唯國原さんのお言葉にあまえて手傳つて頂いてゐます。」と臉をうるませて語つてゐた。

三六、病院に咲く花二輪

白衣の勇士の手足となり、お洗濯やらお裁縫の奉仕。佳話の主といふのは、南區呼続町近藤紡績の女工さん、新潟縣生れの古澤みや子さん(二二)と石澤かつ子さん(二二)の二人である。同一工場に勤績すること七年、五年といふのは、女工さんとしては珍しい

方で、事に當り實直、人に對し親切丁寧、工場での勤務振りといひ、同僚間の評判といひ満點の女性である。随つて工場では養成見廻りとして新入女工さん方の面倒を見、寄宿では共に室長を勤めるといふ幹部級で、工場での重要な存在である。

事變の始つた昭和十二年十月、ふとしたことに感動して、勤務が終ると直にバスで陸軍病院に駆けつけ、部屋の勇士たちに、「みなさんお洗濯ものはありませんか、綻びたものがありましたらぜひ出して下さい。」と呼びかけたのがもとで、其の後も時々は枕頭に花を生けたり、甘い手みやげを持つていつたりして喜ばれてゐる。

さて、ふとした動機といふのは、同工場の女工さんたちが、戦地の將兵に慰問袋を贈つたところ、古澤さん達のものが名古屋出身の水谷武軍曹の手に入つたのだつた。水谷軍曹は、郷里のやさしい女性からの贈物に對し、星明りをたよりに露營の草の上で、こま／＼と深い感謝の書状を書き綴つて送つたのである。

ところがそれから間もなく二人の女性は、水谷軍曹戦傷の報にびっくり、名古屋陸軍病院へ還送されたと聞くや、取るものも取りあへず見舞に駆けつけたのである。病院に

は女性の手に俵たねばならぬ仕事か山ほどあるのに気付いた二人は、自分たちの使命をひし／＼と感じた。女の身としてお國につくす道は、この白衣の勇士を慰め、手足となつてお洗濯も、お裁縫も、私たちの手でしてあげねばならぬと。

勤め持つ身の思ふにまかせぬながら、暇をもとめては同僚を語らひ、毎日曜の様に病院へ駆けつける事とはなつたのである。

三七、病後の身をも顧みず瀕死の勇士へ輸血

病後の身をも顧みず、自らの血を輸血して、危篤の勇士を蘇らせた衛生部員の華は西區澤井町醫師小林鎮雄氏次男で、〇〇部隊陸軍衛生部見習士官公三君その人である。

同君は京都府立醫科大學の小兒科に勤務して、學位論文の完成も目睫に迫つてゐたが昭和〇〇年〇月應召の身となつた。

中支に活躍中である令兄の美雄主計中尉に、たとへ任務は異なるも御奉公に變りはない

決して負けずにやらうと、毎日陸軍病院にあつて、傷つける勇士の治療看護に日夜をわかれたぬ奮闘を續けてゐたが、八月一日進んで傳染病院勤務を志願し、ある時は徹宵治療に従ひ、常に病棟に起臥して看護に努め、眞に寢食を忘れて患者の治療に没頭してゐた。然るに、圖らずも腸チブスに冒されて遂に入院の身となつた。幸ひ月餘にして治療退院し、再び傳染病室勤務を志願し、診療に従事中、十一月十三日朝、同氏擔當の病室に收容中の腸チブス患者が、突然腸出血を起し重態に陥つたので、輸血をしようと血型を調べた所、幸ひ自分の血型と同じなので、病後の身をも顧みず、直に、然かも自ら己が血管に針をつきさして血液を取り、輸血を行つて瀕死の勇士を蘇らせた。その機敏にして然かも崇高な犠牲的行爲には、何人も感激せずにはゐられなかつた。

〇〇部隊長はこの事を聞いて、早速小林士官を衛生部員の華として表彰した。

三八、傷痍軍人の家を援ける美談の主

昭和十四年六月十三日午後五時頃、東區古出來町地内中央線踏切で列車にはねられて

即死した寺島要君は、はしなくも傷痍軍人援護の善行者であることが判り、銃後の人々の同情を集めてゐる。

寺島要君は早く両親に別れて兄弟もなく、叔父にあたる寶飯郡蒲郡町の寺島清二郎さん方で成長し、昨年十一月東區柳原町伊藤玉次郎さん方に雇はれた。その中、寺島君は仕入れのために出入する千種區松軒町二ノ一三大倉信芳さんと知り合つたが、大倉さんの弱々しい物腰に同情して事情を聞くと、同氏は〇〇部隊に屬し徐州戦に奮闘、胸部に銃創を受け、不幸傷痍の身となり歸還した勇士で、其の後健氣にもリヤカーを輓いてまだ息ぎれる體に妻子三人を抱へ前記の場所で八百屋を開業、雄々しくも銃後に再起した由を知つた。そこで寺島君は主人の許しを得て今月はじめから暇を得ては、御用聞きから配達仕入れまで手傳つてゐたもので、奇禍の當日も、其のリヤカーを大倉さんから預つて、主人の許に歸る途中だつたのだ。大倉さんは十四日自宅へ僧侶を招き、寺島君の親戚主人等の來駕を乞ふてねんごろに假葬儀を營み、故人の靈前に深い感謝の誠を捧げるのであつた。寺島君もまた以て瞑すべきである。

三九、武運祈願五十餘社

團旗を先頭に立て、日參團歌を高らかに、列を正して行く少年少女の姿を見ると、誰れでも感激しない者はあるまい。此の日參團の組織に、そして又指導にと、種々努力するかくれたる功勞者がある。それは、千種區弦月町一ノ八太田源市氏である。氏は事變が起ると、直に他の町に率先して、少年少女日參團を組織、出征軍人の武運長久を祈願しつゝ今日に及んで居る。その間雨の日も風の日も休む事なく、未明に起床、さめられた場所に團員を集め色々指導し、六時半を期して團歌を高らかに歌ひつゝ氏神に日參して居る。氏のこの立派な徳に感激して、その子弟を團員として加入させる者が多く、現在では百數十名に及んでゐる。

人影まばらな早朝、高々と聞ゆる日參團歌を聞いて今一時と惰眠を貪つてゐる町民の或者も驚いて起き出づる有様で、遂に町内一般に早起きの風を起させるに至つた。そればかりか、この可憐な少年少女の行爲により、町内の人々に愛國心を振作せしめ、又敬

神の念を養ひ、時局認識上に大いに貢献して居るといふ事である。

尙氏は、武運長久祈願のため日参團代表を引率して、皇大神宮を初め奉り、多度神社・多賀神社等縣内外の神社五十餘社を参拜してゐる。或は又、餘暇を利用して、明治神宮・靖國神社・乃木神社・鎌倉神宮・八幡宮に参拜し、皇軍の武運長久を祈願し、その御神符を拜受して、聯區出身の勇士方へ真心こめた慰問状と共に贈呈した。これを受けた勇士等は、等しく氏の篤行に對して心から感謝し、彌々御奉公の決心を固くした旨禮狀に記して居る由である。

此の外、出征軍人遺家族に對して、よき相談相手となり、各種の世話、身許の保護など、親身となつて活動してゐる。氏の如きは銃後を守る國民の手本ともいへよう。

四〇、勇士の病母をリヤカーで毎日病院へ

第一線に駒を進め手柄を樹てゐる勇士の養母を、何くれとなく世話した上に、ふと

傷ついた同女を病院まで一里餘り毎日リヤカーで運ぶ朗話がある。

東區若葉通り五ノ一六方面委員伊東富三郎氏は、常に貧しい人々に親身も及ばぬ温かい手をさしのべ「佛さんの富さん」とまで附近の人に評判されて居る。氏の擔當區域内たる東區御成町から有田成一一等兵が出征するや、同君の留守宅には年老いた養母横井いとさんだけが淋しく残される事になつたので、何くれとやさしく世話をしてゐた。たま／＼去る九日夜、いとさんが二階梯子から落ちて、たゞさへ不自由な體に、又々右足を骨折した。治療したくも蓄へとてなく、途方に暮れてゐるのを知り、伊東氏は早速自轉車にリヤカーを繼ぎ、一里餘もある東區布池町杉山整骨院まで運んで治療を受けさせそれから後、寒氣肌にしむ師走の街を、毎日同女をのせてリヤカーで運搬してゐることがわかり、各方面から「立派な方面委員だ。」と賞讃の的となつてゐる。同氏を訪へば謙遜しながら語る。

「なに、當然の事です。一人暮しのお婆さんでは淋しいからね。大した事はありませぬよ。自轉車で一走りです。」と。

四一、助ふ合ふのが戦友と床し勇士の妻女

静岡縣駿東郡大平村南屋出身の向笠正夫一等兵は〇〇部隊に屬し、山西戦線で戦闘中懐中物を紛失したので、戦友である西區光音寺町榮二四大前稻作上等兵から金十圓を借りたが、其の後不幸左肩に重傷を受け〇〇病院に收容される身となつた。向笠一等兵は其の恩義を忘れず、義理を果すため實兄太作氏に宛て、當時の事情をこま／＼と記し返金してくれとの便りをした。太作氏は直に大前上等兵の留守宅を守る妻女政子さんに宛に謝禮の言葉と共に送金した。始めて其の事情を知つた政子さんは、勇士の義理がたさに感じて、

（前略）御弟様には山西省の激戦に御戦傷を受けられましたとのこと、どうぞお力落しなく御全快の一日も早からんことを心からお祈り致します。戦地で主人が十圓お貸し致したと申してありますが、お互に助け合ふのが戦友ではないでせうか。御厚意を無にして申譯け御座いなんですが、お送り下さいました爲替はそのまゝお返し致しますか

らお納めなすつて下さい。私としましても主人に申譯けありません。若しお心苦しくお思ひ下さらば、その金で病院に在られる正夫様にお見舞として何かお好きなものでもお送りして差上げて下さい。（後略）

と丁寧な見舞の言葉と共に、天晴れ銃後を守る勇士の妻女としての心情を吐露した便りを送り、

「弟が御世話になつたのみでも感謝して居りますのに、お情深いお便りをいただきま

と太作氏一家の人々を感激させてゐる。

四二、銃後を護る尉と姫

昨年七月事變二周年記念日を迎へて、國民の感激も一段と新たになり、勇ましく大陸に戦ふ皇軍への感謝も、いよ／＼高まる意義深き當日を二層意義づける美談を産んだ。

それは、千種區田代町堀割六二佐藤佐太郎(七二)さん、同妻女きぬ(六〇)さんが、聖戦勃發二周年記念日を前にした七月五日、第三師團恤兵部、並に名古屋地方海軍人事部へ、それト一萬圓づつ計二萬圓の國防献金を申し出られたことである。

佐太郎さんは、滿洲事變當時にも、重機關銃・鐵帽・防毒面等各種の兵器計一萬餘圓を献納し、又近くは戦地へ飴五六十貫を送つた。この外、農山村の救済や、優秀なる學生の學資を出して、勉學を奨励され、又、社會事業に出金された額は相當巨額に上つてゐる。然しながら佐藤さん夫婦は「これほどのことで」と謙遜して居る。尙最近まで住んで居た家屋敷を五萬圓程に買手がついたので、その金に更に資財を加へて、軍用機を献納しようかと考へて居るといふ。事變下の國民として實にうるはしい美舉といふべきで近所の感激の的となつて居るのもうべなるかなである。

四三、か弱き乙女の身て一家十六人の柱

兩親を早く亡ひ、大黒柱の兄が應召した後を護つて、雄々しくも一家十六人の大世帯

を女手一つで切りまはしてゐる女丈夫の美談。

そのやさしくもをしき大和撫子は、中村區太閤通り四、大門食堂と大門玉突を經營してゐる鬼頭みさ子(二二)さんである。同家の經營者、兄鬼頭鏝勇士は昨年〇月應召したが、勝氣なみさ子さんは長期戦下の女性の意氣を示して、兄の留守中の經營を自ら負擔せんと奮然たちあがり、次弟義治君(東邦商業二年十五歳)次妹八重子さん(中村小學校六年十二歳)末弟八郎君(中村小學校三年十歳)の弟妹と、十二人の男女、しかも年長者や世間を渡り歩いた奉公人を統率し、天晴れ銃後の第一線に立つてゐたが、この間、義治君が運動で下肢骨折をして二ヶ月の入院生活をし、みさ子さんは病人の附添から留守番と、文字通り一睡の餘暇もないほどであつたが、よくこれらの困難を克服、骨身ををしまずに働いた。

この献身的努力に奉公人たちも、

「鏝さんの凱旋の日までは、どんなことがあつても守り通しませう。」

と天晴れ出征勇士の家を守つてゐる。みさ子さんは、

「折角應召した兄に、家のことまで心配させては申譯がありません。家の人達は皆力を合せてよく働いてくれます。兄が後顧の憂ひなくお國のために働いてくれれば、それで私達のつとめは果されるのだと思ひます。」と。

かうして、一家十六人が心を合せて女主人を守り立て、ゆく至誠と、みさ子さんの雄々しき心意氣とが通じてが、鑛勇士は本年〇月めでたく除隊、今は一家揃つて銃後のつとめに勵んでゐる。

四四、小僧さんに代り勇士の家を守る童心

中村區西日置町七丁目少年少女日參團の坪井重雄君、渡邊利光君、丸山壽子さん、佐藤可恵さんの四名は共に日置小學校の六年生であるが、日參團が出来ると、その幹部として團長の手足となり、よく下級生の世話をして來たばかりでなく、同町内の書店光榮堂の主人が〇〇隊に召集された後、人手がなくて困つてゐるのを聞いては、体後の奉公

こゝに在りと奮起し、或は問屋への雜誌取りに、或はその配達に、少年少女とも思へぬ大活躍をなし、病氣で歸郷した小僧さんが全快する迄、完全に出征軍人の家を守りつけたのである。

なほその上、この尊い奉仕に感激して有志から贈られた十圓を、氏神と恤兵金とに献ずるなど、この四少年少女はあくまでも純な感ずべき心と行の實行者である。かくてこそ帝國の銃後は永久に不動であるといふべきであらう。

四五、日參少女の純情薫る

集印帳に刻む日參少女の赤心は輝いて港の街を彩つてゐる。感心な敬神少女中島田鶴子さん(一四)(港區眞砂町五丁目二地中島初二郎氏二女)は現在西築地校高等一年に在學中で、小さい時から可愛がつて呉れた隣の尾崎三次氏が事變勃發と同時に勇躍應召、歡呼の聲に送られて出征するや、強く童心に感ずるところあり、武運長久祈願を發念、築

地神社へ朝詣でを始めた。後更に足を伸して朝の一番電車で熱田神宮へも日参することに決心し、一昨年の十月から雨の日風の日其れこそ一日の休みも無く続け來つた今日に及び、夜は又町の日参團に加はつて築地神社へと武運長久祈願をして居る。其のいぢらしさを知る者誰一人として感心せぬはない。集印帳には神社と神宮の朱印が彼女の赤誠を染出してゐる。

この毎日々々の日参行こそは大人も及ばぬ善行で、神のみ知ろしめす少女赤誠の發露である。田鶴子さんは「事變が終る迄は誓つて續ける覺悟です。」と港の少女らしく元氣激刺と語るのであつた。必ずや此の真心籠る日参帳に、花咲き實を結ぶ時が來ること、信ずる。

四六、銃後を護る警察署員の妻女

西區明道町四近藤孝子さんの夫君重義君は、御器所署に勤務してゐたが、一昨年〇月

應召、爾來北支に於て各地に轉戦活躍してゐる。

夫君出征以來、孝子さんは子供のないのを幸ひ、應召署員の上に溫い心を馳せ、慰問文を送るは勿論、新聞雜誌等常に慰問品を贈つて、優しい慰めに努めてゐる。

尙、手不足の中に奮闘してゐる殘留署員にも、昨年暮れの夜間警備の時など、ぜんざいをつくつてその勞を犒ひ、又本年二月のピストル強盜事件の時には、手不足の上の過勞で病床に就いた署員もあると聞くや、鶏卵を持參して署員一同を慰問した。然かも夫君出征以來、照る日、曇る日、熱田神宮へ日参を怠らないのである。銃後を護る署員の妻として、近所隣の賞讃の的となつてゐる。

四七、白衣勇士の一家へ溫い手

名古屋婦人の心意氣

隣縣の戦傷軍人家族へ溫い情の手を伸べて、名古屋婦人の心意氣を示す四婦人の美談

——東區長埴町二ノ七町總代石政清氏母堂石黒ミキさん(七一)愛知一中教諭猪飼俊二氏夫人琴さん、金物商齋藤ミサヲさん、果物商伊藤いつさんの四婦人は、事變勃發以來率先して、名古屋陸軍病院東練兵場分院へ慰問に行つたり、兵隊さんの汚れ物洗濯に心盡くしをしてゐた。同病院に江南戦線の激戦で重傷を負ひ、瀕死の身を横たへてゐる静岡縣沼津市出身の、飯塚元一といふ一等兵がある。此の一等兵を看護のため、臨月の身ではる／＼來名してゐた妻女のハルエさんと相知り、老母と二人の子供を抱へ貧しい生活と闘つてゐる事情を聞くや深く同情し、果物屋の伊藤さんは「病人は果物を欲しがるでせうから之をあげて下さい。」と毎日のやうに新鮮な果物を贈つて居た。去月十六日ハルエさんが伊藤さんの家へ「赤ん坊が産れさうです。」と駆込むや、七十一歳のミキさんをはじめ四婦人は「それ早く産病院へ」と自動車で大醫院に入院させ、めでたく男の子をうませた。入院中も四人の婦人が交代でたづね、女らしいやさしい世話をくりかへし、種々看護したが、この費用は一切ミキさんが息子の清氏を説いて支拂はせた。尙ミキさんは、身寄りのないハルエさんを自宅裏の家に住まはせた上、「赤ん坊を抱へて夫の介抱

は大變だらうから」と、母親セキさんと二人の子供を、沼津在から呼び寄せ、母子五人の食事から間代一切を負擔してゐるが、四人の婦人の温い心遣りには、附近の人々も感激し、何かとこの不幸な隣縣の戦傷軍人家族を慰めてゐる。石黒ミキさんの宅を訪へば折よく「今兵隊さん達の汚れ物の洗濯を終つて病院から歸つて來たところです。」と居合はせた三婦人と共に交々語るのであつた。

「あたり前の事をやつたゞけで、別にほめて頂くやうなことはありません。縁もゆかりもない隣縣の人とは言へ、あの人達の御主人も御國のために戦つて傷つかれたのです。銃後のつとめとして當然のことをやつたまでです。」

と謙遜してゐる。温情に感激してゐる飯塚ハルエさんを假住ひに訪へば、夫君勇士の看護のため病院に附添中で不在であつたが、子供の守りをしてゐた母親セキさんは、老の目に涙を浮かべながら語つた。

「こんな有難いことはありません。石黒さんのおばあさんを始め、みなさん、本當に神様のやうな方々です。見も知らぬあかの他人を、こんなにして頂くかと思ふと、わ

たしや有難くつて涙がこぼれます。傷ついた息子もどんなに感謝してゐるかしなければ。早く萬分の一の御恩でもお返ししたいと思ひます。」

四八、軍國婆さん、勇士の家庭へ生きた便り

天晴れ軍國婆さんよと、勇士の家庭を喜ばせた市内西區本郷町五丁目二一番地山田かすみさん(五八)は、女の身の且つ老軀をも厭はず、わざ／＼將兵の勞苦を稿ふため大陸に渡り、〇〇の地點に〇〇部隊の勇士を慰問し、歸りのみやげにと勇士達の故郷への便りを預り、前線の活躍状況を齎して無事歸名、長途の疲れも休めず、市内は勿論、遠くまで數十勇士の留守宅を歴訪、戦線からの便りを待つ家族に、數々の武勳談と懐しの手紙とを渡し感謝感激させた軍國婆さんである。すつかり歴訪を終つたかすみさんは、「命懸けで行つて來ました。戦地の兵隊さんは本當に涙の出るやうな働きぶりです。私

は名古屋だといつたら、「私達の元氣なことを傳へて下さい。」と多數の荷物を預つて來ました。どの家でも息子や兄や夫に會つたやうな氣がすると喜んで預けて、こんな嬉しいことはありません。すつかりお訪ねして重荷を下しました。」

四九、半島出身の模範青年

名古屋市立岩塚青年學校本科四年生山中信一君は、朝鮮黃海道信川郡南部面鳳凰里の生れで、南部面普通學校を優秀な成績で卒業、其の後三ヶ年程、農業の手傳ひをしてゐたが、折柄嚴父が親戚の保證債務辨濟の爲、殆ど破産状態となつたので、二男であつた彼は、同地の鬼頭劍次郎氏の世話で、同氏夫人の生家である名古屋市中川區岩塚町製粉業川口定義方へ傭はれることゝなつた。

川口一家の人々は、信一君を全く家族同様に親切に世話をしてゐる。彼も亦其作業

に當るや、誠に熱心に自分の仕事として精勵するので、其の主従の關係は實に麗しいものである。

信一君は毎日相當激しい勞働に堪へながら、自分の身の廻りのことは、作業服の繕ひから、洗濯に至るまで、作業の暇々に行ひ、決して家人の手を煩はさず、又、郷里へ便りある毎に、年老いた祖母の許へお菓子類を託する等、若い者にも似ぬ細い心の持主である。

支那事變勃發直後、主家の令弟定季氏が應召せらるゝや、彼は一層業務に精勵し、家業の中心となつて活躍してゐる。主人も亦信一君を信賴すること厚く總べてを彼に任せ、物價騰貴の折柄とて増俸する旨申し渡したところ、彼は色をなし、

「私も日本人です、出征軍人の家を守るに増俸して頂く謂はれはありません。」とて固く之を辭退した。

其の美しい精神には、一家の人々は申すに及ばず、近隣の人々に至るまでいたく感激してゐる。

十三年四月、自ら進んで岩塚青年學校に入學、非常な熱心さで學業にいそしみ、餘暇には巡迴青年文庫を利用して修養に努めるなど、進歩誠に目覺しいものがある。

青年學校の出席に就いては、主人に十分の理解があつて、便宜を計り、且つ獎勵にとめられるので、彼も亦或は休日に働き、或は朝早く起き晩遅くまで働いて、主人に迷惑の少なきやう注意してゐる。此の主人の理解と彼の不斷の努力とは、十三年度に於て一ヶ年皆勤賞と成績優良賞とを贏ち得たのである。

尙又青年學校生徒自治會役員として、他生徒の出席の督勵に、校内風紀の取締りに、献身的の努力を爲し、職員生徒間の信望を集めてゐる。宜なる哉、昭和十四年度の査閲執行さるゝや、戸山査閲官殿は非常時青年の活模範なりとして、特別賞詞を與へた。

五〇、戦線の勞苦を偲び勇士の子に濫い情

市内中村區大日町二丁目二二番地吉田市右衛門氏は、資性温厚友情に富み、眞面

目に鐵道事務に精勵されてゐたが、支那事變勃發するや支那派遣を志願し、北京野戰鐵道司令部附鐵道省派遣員京漢線順德機辨區詰として、日夜危険を冒しつゝ、鐵道建設守備輸送に献身的努力を續け、戰線の勇士と變らぬ活動をしてゐる。しかも戰線の將兵が言語に絶する勞苦を克服し、東亞新秩序建設に邁進する雄々しさに深く感激し、「僅かながら出征勇士の子に獎學の一部にも。」と、金貳拾圓を榮生小學校長宛に郵送して來た。學校長は其の篤志に感激して、其の誠意を傳達し之を配布することにした。洵に感ずべき美舉である。

五一、勇士の心を汲む孤獨の老母

上海戰線に活躍、數々の武勳をたて、惜しくも遂に江南の華と散つた故歩兵伍長加藤良雄氏は、西區庭町出身で、功七級の金鷄勳章賜をはつた護國の勇士である。昨年〇月唯一人の母を残して應召した良雄氏は、それまで上宿青年學校教練指導員として、青年

教育のため盡瘁してゐた。銃後を護る孤獨の老母かねさんは、良雄氏の戰死の報を聞いても、

「御國のためにお役に立つてくれたのを喜んでゐます。」

と、健氣にも涙一滴見せず、天晴れ軍國の母よと人々を感動させたが、良雄氏の葬儀のあつた翌日、學校に山西校長を訪ひ、生前の恩を深く謝した後、

「良雄が御校に御世話になつて居りました時、青年訓練にも是非擲彈筒が一つほしいと、よく言つてゐたのを思ひ出し、お役に立つたらあの子もさぞ喜ぶことだらうと存じまして、あの子に代つて寄附したいと思ひ、需めに行きましたが、個人には賣れないとのこと、誠に世話ですが費用は出させて頂きますから、御校の名で買つて頂けないでせうか。」

と申し出られた。校長は深く其の厚意を謝し、早速之を需め、感謝狀を贈つて其の美舉を賞し、今は老母の志によつて得た擲彈筒を用ひ、良雄氏のありし日を偲びつゝ、教練にいそしんでゐる。尙かねさんは、夫とは良雄氏の生れる前に死別したるも再婚せず、夫

の遺児を女手一つで立派に育て上げたのであつた。家計の豊かでないのに此の美譽のある、誠に軍國の母として敬服すべきである。

五二、戦線と銃後とを結ぶ温い友情

戦線と銃後とを結ぶ慰問袋が縁となり、過ぐる満洲事變以來今次事變まで七年間、文通で温い友情を通してゐた失明の勇士と、中京の純情な一中學生との劇的な初対面、此の勇士は、島根縣仁多郡龜高村大字高田出身の田邊政義軍曹で、北支方面各地に轉戦幾多の武功を樹てたが、一昨年九月の津浦線滄州の戦で、敵手榴弾のため、不幸にも兩眼を失明、今は東京市小石川區大塚町の失明傷痍軍人寮で、盲人として更生の日を待つてゐるが、嘗て満洲事變に現役兵として出征中、偶々市内西區稻生町香吞、東海中學校一年生瀧村昭夫君(一四)―當時庄内小學校一年生―からの激勵と真心の慰問袋とによつて、戦線と銃後とは固く結ばれることゝなつた。今次事變に田邊軍曹が應召してからも

時々慰問袋を贈り、絶えず慰問文と現地よりの便りとの交換が続けられてゐたもので、温い友情は日々に其の度を増して行つた。

對面の機會は終に來た。田邊軍曹は休暇を得て歸省後再び東京へ歸る途中、去る八月三十一日來名、瀧村君の宅を訪れ、同君の家族と感激の一夜を語り明かした。どんなにか嬉しかつたことであらう。翌九月一日瀧村君の父君正彦氏夫妻の案内で、名古屋市役所に前島根縣知事であつた三樹助役を訪れ、杉山軍事援護課長、故安藤元一中佐和子未亡人等に銃後の後援に感謝の挨拶を述べたのであつた。

奇しくもほゞ多ましい軍國朗話ではないか。

五三、銃後に芳ばし努力の小店員

井澤吾一君(東區百人町一中島教三方店員)は資性温順率直、克く店業に勵み只管自家の繁榮を祈りつゝ、日夜努力して居たが、主人中島氏が去る昭和〇〇年〇〇月應召するや

留守を守る夫人ちよ子さんが康之君、啓友君の二兒を擁して奮闘するのを助け勵まし、僅か十四歳の身を以て營業至難な酒・醬油業を引受け、注文配達は勿論、幼兒の世話をも厭はず働さ續ける等聽く者をして感激せしめて居る。本年からは筒井青年學校に入學して忙しい家業の傍ら修養に勵み、見る者をして愈々感激させてゐる程の努力家である。

中島氏が各地に赫々たる武勳を建て、本年〇月歸還せらるゝまで、主人が粒々辛苦築き上げた店業を、聊かも挫折せしめず、其儘繼續して來たのは、實に吾一青年の努力の資と云ふも過言でない。宜なるかな本年六月町では其の徳行を表彰し、東區長揮毫の激勵書並に杉浦重剛先生の倫理御進講録を贈つて、其の勞を犒らつた。

五四、銃後を守る町總代と女醫

病の床に悩む勇士の家に、暖い手をさしのべ、勇士の遺家族を世話したといふ町總代と女醫とがある。

名古屋市千種區田代町字城山一八、深尾拾三さんは、昨年〇〇部隊の勇士として應召した。後には母親こうさん、妻つぎさん、長男良一ちゃんとが留守を守つてゐた。それが十二月の初め頃、良一ちゃんとお母さんとが相次いで病氣にかゝり、つぎさんは頼る人もなく、一日々と悪くなるお母さんと、可愛いゝ子の病狀を見守り、小さな女心をいためてゐた。このことを知つた同町々總代長岡哲成(四一)さんは強く心を動かされ、同家を訪ねて慰問の言葉を述べ見舞金を贈つた。

哲成さんからこの話を聞いた同町田邊小兒科醫院長田邊かすみ(三六)さんは、心から同情して毎日二回無料で往診することにした。その上薬を與へ、見舞金をも贈つた。尙、哲成さんと力をあはせて軍事後援會や、區役所へも手續をし、一家の憂ひを取り除くことに努力してゐた。このことが千種署員によつて知られ、署長さんはじめ署員一同は二人の美しい行をほめたゝへた。この二人の情によつて出征した勇士拾三さんが、どんなに安心して御奉公出来ることだらう。まことに銃後を護る美談といへよう。

西區松前町六一五ノ三牧田隆治君は、聯區警防副團長並に聯區青年團長として、常に熱心忠實に自ら範を示して團員の統制誘掖、指導養成に努めてゐたが、今次事變の勃發するや、日夜献身的努力を續け、勇士の歡送迎やら、家族の慰問は固より、遺家族の救護に對し、幾多の隠れたる尊い犠牲を拂ひつゝある。

中にも、昭和十年のくれ、縁場町二吉田一郎氏が、妻女つぎさんはじめ四兒を残して滿洲守備に出動し、つぎさんが生活困難の爲、夜半二時三時までも内職をしてゐるといふことを聞いて、牧田さんは味噌やら溜やら子供の小遣までも與へて世話してゐたが、主人一郎氏が除隊後、間もなく召集せられ、〇〇部隊に屬して再び征途に就いたので、牧田さんはこの名譽の一家に銃後の心配をさせてはならぬと、更に一層力を入れて世話し、妻女つぎさんが、「何か手に職をつけたい。」といふので、西區方面事業助成會花ノ木授産所のミシン講習所へ世話した。

尙、町内の松島吉次氏、角田梅三郎氏と共に、約二百圓を醸出して、出征者の武運長久祈願祭を行ひ、遺家族に對して饌餅を贈呈、勇士の子弟に教育獎勵の一助にとて机上辭典一冊宛を與へた。この銃後の護りありてこそ、皇軍の活躍亦目覺ましきものがあるのも道理である。

五六、傷より深い心の惱みに投げる光明

名高商教授宇都宮仙太郎氏は、厚生省囑託として名古屋陸軍病院の勇士達と、毎週數回膝を交へて今後の身の振り方の相談相手となつてゐるが、或日氏の前に立つた見るからに頼もしさうな青年があつた。此の青年は丹羽郡岩倉町字川井出身の大島正雄軍曹であつた。大島軍曹は、中區新榮町四丁目十九番地書籍商福文堂の店員で、一昨年〇月應召、〇〇部隊の輕機銃の名射手として壯烈な敵前上陸を敢行し、左足を粉碎、後送されて名古屋陸軍病院に療養してゐ

たのであつた。

自轉車にのつてかけ廻らねばならぬ書籍店員にとつて左足粉碎は致命的な負傷であつた。そこで其の悩みを聞いた宇都宮教授は「義足でも乗れる自轉車を考案してみませう。女乗りの自轉車にしてペダルに義足を引つかける紐をつけると何とか乗れると思ふが……。然しいつそ自分で書籍店を開業したらどうです。」といつて見た。

然し書籍商組合には十ヶ年店員として年期奉公を勤め、店主の眼識に適つた者だけが、それから二年後に漸く組合員に加入出来る規定である。つまり計十二年たゝぬと店主になれない規約があり、大島君は八ヶ年しか勤めて居なかつたのだ。そこで宇都宮教授はこれを前組合長の丸善支店支配人司忠氏に訴へた。司氏は勇士の更生の爲ならば規約改正も當然の事であらうといふので緊急幹事會を開催し、大島君のため特例を設け組合加入を承認、一同で銃後網をはつて開店援助をする事を申し合せたのであつた。

大島君を我子の様に可愛がつてゐる福文堂主服部さんは大喜びであつた。斯くて去る○月召集解除となつた大島軍曹は、此等の人々の暖かき援助と理解の下に、今年二月千

種區仲田通りに新しく大島書店を開き、いそ／＼と更生の新路をたどつてゐる。

五七、凱旋して始めて知る愛妻の死

東區鍋屋町二ノ五〇果物商在郷軍人一等兵林隆吉君は、すでに一戸をかまへ果物商を営んで居たが、主家筋の懇望もだし難く、榮屋の果物店にも連日顔を見せなければならぬやうになり、身の三つ四つもほしい程に働き通してゐるといふ稀れに見る精勤家である。

今次の事變勃發するや、同方面一帯に應召勇士宿泊中、在郷軍人分會の班長としてその慰問接待のため、身の疲れをも忘れて活躍するのであつた。

照子さん(二三)清隆君(一〇)昇君(五)それに生れて間もない赤ちゃんの四人の子供を抱へ、一家を切り廻してゐた妻女静子さん(三四)は、健氣にも夫をはげまし、産後の肥立もまだはか／＼しからぬ中から、店仕事やら子供の始末やら、心身を勞すること甚し

かつた。之が爲か遂に病の床につく身となつた。併し夫の御奉公がにぶつてはと、里方て病を養ひつゝ夫を激勵するのであつた。

隆吉一等兵もこの妻女にはげまされつゝ御奉公をつゞける中、自らにも召集令狀が来たのである。男子の本懐これにすぎずと、勇躍應召征途に上つたが、氣に掛るのは妻女の身の上であつた。産後の心勞がもとでの病勢は重態を傳へ、或は再び起てぬのではないかとさへ氣づかはる程だつた。

四人の子供をそれ／＼の親戚に托し、後事一切を隣人知人に依頼し、病床の妻の上を心を残しつゝ、○月下旬には彼の地に渡り奮戦武勳を立てたのである。

ところが、静子さんの病勢は其の後重る一方で、遂に十一月十三日歸らぬ客となつてしまつた。其の臨終に際し、「夫が氣を落して勇氣が挫けては吾國にすみませんから。」と、死を秘めて夫を勵ます血を吐く思ひの遺言をしたのだつた。

この健氣な臨終、事變に殉じたとも見るべき静子さんの死に感激した知人親戚は、相寄つて盛大な葬儀を営んだが、夫君隆吉君のもとへは、静子さんの意志通り歸還の日ま

で誰からも報ずるものはなかつた。

子供からも隣人からも、妻女の動靜が「ばたつ」と止つた事に不審を抱きつゝも、軍務の爲め總てを忘れて奉公してゐた隆吉君は、明けて○月無事召集解除の身となつて、我が家へ歸還し、こゝに始めて妻女の長逝と、健氣な臨終の模様とを知つたのである。

静子さんの如きは、誠に武夫の妻の龜鑑と言ふべく、又此の赤心に感じた親戚町内の人々が、よくこの貞婦の心を心として護りたてたところにも美談の花の香りを高からしめてゐる。

五八、偉大なる教化、兒童と共に神苑の清掃

時を離れた鳥は東雲の空を飛び、木の間を吹き渡る風も爽かな曉の社頭に、純真な兒童と共に敬虔な感謝の祈りを捧げる一紳士がある。その姿には一點の曇りもなく、磨き澄した鏡の如く神々しくさへあつた。この紳士こそ東區古出來町稻荷組の水野小治郎氏

である。水野氏は過ぐる昭和十年三月まで六郷小學校に教鞭を執つてゐた。奉職中から

「日本精神の淵源である敬神崇祖は、年老いてから俄か作りに吹き込んでも駄目だ、神を敬ひ祖先を尊ぶ心は、汚れない子供のうちから涵養すべきである。更に日曜日について一家言あり、曰く、日曜日の日字は日本の日である。我國では光輝ある國體の祖神である天照大神を日と仰ぎ奉り、東天を拜して彌榮ゆく 皇室の御安泰と、民草の上にかぎりなき神護とを祈るのが日本人の常である。西洋では日曜日を安息日と言つてゐるが、無比の國體を誇る日本の日曜日は、祖神に仕へ奉る日である。祖神の恵みを感謝する心で神苑を掃き浄めるなら、自ら己の心の塵も取り除かれて清淨となる。」

との不動の信念から、明日の日本を背負つて立つ兒童の指導に身血を注ぎ、校長の諒解を得て教壇から街頭への實踐と、氏の信念は移行した。そこで各町の少年赤十字團を指導して、毎日曜日に早起會をかね、夫々その氏神に參拜せしめ

一、神を敬ひ祖先を尊びます。

一、天皇陛下に忠義を盡くします。

一、人の爲、世の爲になる事を致します。

一、よく働く人になります。

一、心と體を立派に致します。

と純真な神前の誓ひをたて、曉の神苑に奉仕の清掃が行はれたのである。

この水野氏の熱心は、遂に六郷小學校はもとより、飯田、矢田の各小學校までも動かす、これらの聯区内にある矢田町の六所社・白山神社・大曾根の片山八幡・下飯田の六所社・上飯田の六所社・山田の金神社・天神社・大幸町の八幡社・古出来町の稻荷神社の九社に及び、氏はその日を楽しみに自轉車に乗つて各社を巡拜し、兒童と共に清淨な一日を過してゐた。

慈父の如く敬慕する教へ子から惜まれつゝ、十年の想出を教壇に残して退職後も

「私は、私の達者な間はどんな事があつても神社參拜を廢めない。これは國に對する私の御恩報じである。」

と一層熱心に奨励して来たが、本年六月耳を病んで手術し、それ以後自轉車などに乗り廻る事は嚴禁され、各神社を巡拜する事が出来ないが、氏の教化を受けた兒童は熱心に奉仕を續けてゐる。

今次事變の勃發と共に、町内の少年少女日參團には、自ら先頭に立つて日參の唄も高らかに、朝夕二回氏神に參拜し、氏が病床に臥した時分には、夫人玉枝さんが代つて少年少女を指導し、やさしい銃後の母として兒童達にしたはれてゐる。

五九、純情の小旗振つて兵隊さんを歡送迎

省線〇〇驛を通過する軍用列車歡送迎の人波にもまれながら、幼兒を背におぶつていつもの日の丸の小旗をふつてゐるお下げ姿の少女がある。白エプロン、白褌の國婦のユニホームの群にかくれて、人目にこそは立たないが、この一年半歡送迎を一度も缺かしたことなく、驛でも話題に上つてゐる。この少女は、熱田區役所前の森後町一ノ七、うどん屋川崎桑八さんの長女田鶴子(一六)さんで、背の幼兒は妹三千代ちゃん(三)である。

田鶴子さんは一昨年〇〇月、從兄の港區寛政町出身〇〇部隊佐藤信一上等兵が、大場鎮で壯烈なる戦士をとげた際、郷里へ書送つた悲壯な遺書に乙女心を強く打たれて、兵隊さん列車慰問を發念し、特に傷痍軍人にはお小遣をためて買つた京人形や花束、郷里の繪葉書、熱田様のお守り、日の丸のハンカチなど床しい贈物をつづけ、白衣の勇士や戦地の兵隊さんから毎日禮狀が十數通づつも届けられてゐる。父の桑八さんは同區警防團の消防班長を勤め、後備役工兵上等兵である。シベリヤ出兵の時、現役であり乍ら出征のできなかつたことを今でも残念に思ひ、商賣柄猫の手も借りたい位の忙しさの中でも、田鶴子さんの兵隊慰問だけは缺かさせず、又母のまつ子さんも國防婦人會の役員で、どんな忙しい時でも田鶴子さんの兵隊慰問を勵ましてゐる。この一家心を協せた美しい銃後の努力には皆感激してゐる。

六〇、鬼將軍も感激の涙

「我子に知らすな」と老父の遺言

昨年十二月、大陸の〇〇方面に轉戦又轉戦、半歳も郷土からの楽しい便りを受けなかつた〇〇部隊へ、手紙や小包が一度にどつと届けられた。

その中に中川區古渡町島ノ前六〇小川辰夫さんから、其の〇〇部隊の部隊長に宛てた一通の封書があつた。早速之を披いて讀んだ部隊長の面は、次第々々に曇つて行つた。讀終るや、陣頭に立つては鬼將軍とさへ呼ばれた勇將部隊長の兩眼から、キラ／＼と感激の涙の湛へてゐるのがうかがはれた。その手紙には次のやうなことが書かれてあつた、

(前略) 私儀は今回部隊長殿の御指揮下に名譽ある皇軍の一員としてお使ひ下さる小栗領逸の義兄であります。義弟領逸を種々お世話下さいまして、厚く御禮申し上げます。つきましては、恐縮ではございますが部隊長殿に折入つてお願い申し上げます。それには「今〇〇に参加してゐる、無事任務に服してゐる。」とのことで、家内一同喜んでゐますが、次に「父の病氣は如何か、度々お見舞ひしたいが、毎日々々移動してゐるので手紙を書くことも出来ぬ。」と老父の病氣を心配して來て居ります。部隊長殿 實は領逸應召の時、す

でに老父は病床にて外へも出られず、見送りすることも出来なかつたのですが、〇〇に出發の節は近くの鐵道沿線まで乳母車に乗り見送り致しました。それ以來病勢は頓に悪化しまして、遂に去る九月二十五日午前八時十五分永眠致しました。父は死ぬまで領逸の寫眞を片手に、戰地にある領逸の所へは俺の死を知らすのではない。あれも三歳で母に死別し、母の愛否その顔さへも知らず、今又俺には死に目にもあふことの出来ぬ不幸者である。然し今はあれも 天皇陛下の御爲國家の爲めに捧げた體、あれは我子供ではないのであるから、戰地へは、わしの死んだことは決して知らすではない。とかたく遺言して死にましたから、未だ領逸のところにはその知らせも致して居りませぬ。どうぞ部隊長殿、私ら家内の者の心中御推察賜はりまして、良き折がございました時、お傳へ下さいますやうお願い申し上げます。

嗚呼なんたる立派な父親であらう、可愛い、我子に自分の死も知らせず、一途に御國の爲に御奉公させようと念願した雄々しい老父の姿、これこそ皇國日本のゆるぎなき礎である。

柱と頼む件を君の御楯とおくつた老母が、隣人愛の總動員によつて幸福な生涯をおくつた銃後援護陣の感激美談の一篇——中區東瓦町七四輻重兵一等兵青木金治勇士は、昭和〇〇年夏、家にたゞ一人残した脚の不自由な六十を二つも越した老母かくさんの身を案じつゝ戦線に征つた。同じ町の在郷軍人班長天野重一氏は、このことを分會員や町總代山本武五郎氏、家主吉田太助氏などと相談、何か救の手をと奔走したのであつた。

事情を聞き知つた聯區小川小學校の大原校長は職員に諮つた。當時高等科二年女子組擔任の鷺見訓導は、生徒に何とかならぬものかと話した所、「私達で御手助けしませう。」と申し出た。生徒は二三人づつ交代で登校前と放課後老母をたづね、朝夕食の支度や掃除洗濯などを引受けて、翌年三月卒業までそれをつゞけたのであつた。卒業後は誰が世話をするかが又心配の種であつた。ところが卒業生の一人中區西境町一ノ八水野銀三郎氏三女きぬ子さんが「それでは私が一人で」と同家に泊まり込み健氣な働振りを見せ、

親切に老母を介抱して町民の感激の的となつた。

未さらに以前から同家二階に下宿してゐた松坂屋店員酒井平三郎氏が「私も最近結婚することになつた、店の規約で下宿住ひは出来ないわけだが、老母がこの事情故特に店に頼んで妻に一切のお世話をさせることにする。」と申出たので水野きぬ子さんは昨年十月末から母校の看護婦助手として勤めることゝなつた。

此の間、大野班長は會員を動員し、國防婦人會と協力し、常に何くれとなく慰問し、町總代の山本氏はいろ／＼相談相手になり、家主吉田氏は家賃を全免した外、酒井氏ともう一人の下宿人からの間代十圓もそつくり老母に提供する、隣家丸吉飲食店主荒川開二氏は何ヶ月もの間食品をおくり、近隣の人達も温い同情の手をさしのべるのであつた。特に酒井氏の新妻なつ子さんは姑に仕へる如く、献身的な看護をつゞける様は、涙なしには見られぬ有様であつた。

老母かくさんはかうした多くの人達の色とり／＼の美しい心の花に包まれ、人々の厚い同情に感謝しつゝ、件の健闘を祈りながら、昨年十一月六日み佛の膝下へ旅立つた。青

木君が出征してから一年有半に織りなされた銃後の錦こそ、げに得がたいものといはねばならぬ。

尙青木金治勇士は武勳赫々本年〇月末召集解除無事歸郷し人々の厚い情けに感謝して居る。

六二、父の遺訓を守り一家を背負ふ軍國少年

今次の事變は幾多の健氣な少年少女を生んでゐる。市内西區室町、庄内小學校高等科二年生長内豊藏君(一五)も其の一人で、數年前母を失ひ、父豊七上等兵は應召して〇〇部隊に屬し、數々の戦功をたてたが、終に昨年七月山西省〇〇の激戦で名譽の戦死を遂げたのである。後に残されたのは目の不自由な祖母ひでさん(六一)と幼い弟妹三人で、末つ子の省藏君(五つ)も間もなく亡き父の後を追つて病歿した。豊藏君兄弟の歎きは想像に餘りがある。

然し豊藏君は決して途方にくれるやうな弱い少年ではなかつた。今は亡き父が生前戦地から幾度も書いて寄越した、「兄弟仲よくおばあさんを大事にして立派な人になれ。」との遺訓を守つて、學校から歸ると夕刊の配達に駆けめぐり、而も學業成績は優秀で、祖母には孝養を盡くし、弟新藏君(八つ)妹君江さん(一〇)の面倒を見るといふ風に、學校や近所隣は勿論町内の褒め者となつてゐる。願はくはこの健氣な軍國少年の上に幸あれ。

六三、銃後に光る老翁の報國

雨の日も風の日も白装束金剛杖を頼りに戦死者遺族の門に立つて念佛を稱へ歩く老翁こそ、東區布池町二七に餘生を送る三輪酉次郎さん(七九)其の人である、銀色に光る鬚髯、和やかさを湛へた瞳に満ち足らうた表情を輝かせて「南無阿彌陀佛」と書いた書箋紙を佛前に供へる功德な行を續けて行く。

護國の英靈の冥福を祈るには如何にすればよいかと思つてゐる時、偶々戦傷された方から、戦場に行つて初めて念佛の有難い尊いものである事が分つたと言ふことを聞き、「念佛こそ日本の魂である、これで英露を慰めよう」と發願し、昨年の二月中旬から喜字の祝を終つた七十九歳の瘦軀に鞭うち、念佛報國のため市内の譽の家を一軒残らず慰問しようと目下行脚中なのである。此の至誠熱情に感激せぬ家としては無く、銃後に美しい話題を投げかけてゐる。三輪さんの挺身銃後報國は、去る昭和六年の滿洲事變の頃から始まつて、或は戦死者の位碑を作り、或は戦死した軍馬・軍犬・軍用鳩の碑を建立する等にまで及ぼさうとしてゐる。三輪さんは「もう此の世に思ひ残すことはない」と朝陽の一杯に射し込む八疊の部屋に「南無阿彌陀佛」の書を隈なく掛けて、童顔和かに慈愛温情を湛へてつゝましく語つた。

六四、箒で奉仕の六人少女

毎日々々下之一色町の淺間社に詣では、皇軍將士の武運長久を祈願し、つゞいて境

内に塵一つも残さじと力を合せて掃き清め、靜かに別れて行く六人の少女がある。それは中川區正色尋常高等小學校在學中の高等科第二學年の生徒、鬼頭ふき子さん、西川みつ子さん、村上久子さん、山田さわ子さん、山田百合子さん、服部まさ子さんの六人である。昨年一月の或る朝、この神社に參拜したふき子さんとみつさんは、學校で先生に色々と訓話を承つてゐるが、なにか私達少女で出来る仕事は無いだらうかと色々相談し合つた。やがて二人が思ひ着いたのはこのお宮の掃除だつた。出征兵士の方々が最後のお祈りをなさるこの境内に、木の葉や紙屑の落ちてゐるのはもつたない。こゝに氣の着いた二人は、即座に神社清掃に取掛つた。この事が、いつの間にか級友の四人に知れて、新しく四人の同勢を加へ、風が吹かうが、雨が降らうが、心に誓つたこの少女達は銃後の此上もない尊い仕事と考へ一日も缺かさず手に手に箒を持つて集つて來て今日も一日尊い行の生活をしたのだと敬虔と感謝の念とにひたりつゝ歸つて行くのである。この美しい姿は町人をして感動せしめずにはおかなかつた。

尚、村上久子さんの母じようさんは、時々この少女等の仲間に入つて餘念なく清掃運

動に協力してゐるのである。

六五、銃後に咲く誠意の華

浅井秀夫君（東區百人町一加藤彌四郎方店員）は性剛健、しかも温情溢るゝ好青年である。刻苦精勵して加藤方の家業砂糖メリケン粉商を守り續けて來たが、去る昭和〇〇年〇月加藤氏の榮ある應召に接するや、留守を守る久子夫人が幼兒美也子さんを養育するのを助けて、仕入配達等の激務を一身に背負ひ、粉骨碎身、其の衝に當つた。過勞の結果か遂に病魔に犯されるに至つた。醫師から歸郷靜養を勧められたが、主家の困難を見るに忍びずと言つて、治療を受けつゝ業務に服してゐた。

其の力行は寔に涙ぐましく、戦地にある主人をして、後顧の憂なからしめんとする誠意は、聞くだに嬉しい佳話である。中島氏も各地に武勳の数々を樹て、歸還、初めて浅井君の美譽を知り、感激の涙新なるものがあつた。幸ひ浅井君の病氣も全快し、本年は

徴兵検査に合格、天晴皇國干城の一員として武勳を樹てる日も間近い事と思ふ。町でも銃後の模範青年として其の善行を表彰し、東區長揮毫の激勵書並に杉浦重剛先生の倫理御進講録を贈つて之を賞揚した。

六六、主家を扶けた軍國店員

主人の出征以來幼い子をかへた主婦を助け、主家の青物商を一手に引受けて、勇士の家を守り、あつぱれ銃後のつとめをはたしてゐる感心な青年がある。それは、千種區田代町字仲田一〇六、青物商伊藤金一さん方の店員坂野一男（一一）君である。金一さんは、昨年〇月應召に當り、後にはやつと二歳になる長男定雄ちゃんを抱へた妻女文子さんが留守中の商賣を支持しなければならぬのを心配して、親しい人といろいろ相談したところ、二年前から同家の店員となつてゐた一男君は

「御主人商賣の事は決して御心配いりません。私が引受けました。存分に御國のため

働つて下さる。」と申し出た。金一さんは、これに勇氣を得すべての事を頼んで、雄々しく出征と健氣にも申し出た。金一さんは、これに勇氣を得すべての事を頼んで、雄々しく出征した。

一男君は、新しく雇つた小店員大口武雄君を指揮して、朝は早くから市場に仕入れに行き、歸つては得意廻りやら、家の手傳等一生懸命に働き、主人の應召前にも増して商賣を繁昌させた。

去る六月不幸郷里の母に死別したが、野邊の送りをすませると、直に歸つて勇士の家を守り通し、それからそれへとかひなく働いてゐる。これを見た町内の人々は、これこそ銃後を守る立派な青年であると大いに感激して町内一致、一男君の表彰を決議した。そして表彰状と金一封とを送つて、同君の篤行を賞揚した。

同君は、既に海の勇士として徴兵検査に合格して居たので、その後間もなく吳海兵團に入團し、現在では、あつぱれ帝國海軍々人として日々雄々しく軍務に服してゐる。

六七、健氣な三人の女給さん

廢業を決意した女主人を助けて、純情な喫茶店の女給さんが、三人心をあはせて仲よくがつちりと組み、主人出征後の喫茶店を守りたてゝゐる。

西區上島町一、喫茶店ダイヤの主人稻垣義郎氏は、名譽ある召集を受けて〇〇部隊に屬し、北支南支に轉戦してゐるのである。

留守を預かつた妻女とみさんが營業を續けて生活戦をしてゐたが、時局の影響と然かも近所に同業の喫茶店が出現したのとで、極度に營業不振となつた。已むなく妻女とみさんは廢業を決意し、實家へ歸らうとした。この女主人の苦境を思ひ、同店に働いてゐた女給早川笑子さん、加藤幸子さん、伊藤つた子さんの三人が、

「私達は今後無給でかまひません、御主人が名譽の出征中、廢業することはすみませぬ」と、妻女の廢業を讎意させ、爾來三人が眞に心をあはせて前にも増した繁昌ぶりを示し、銃後の女主人を安心させてゐる。

六八、遺兒の上に幸あれ！

西區則武町輪の内橋本桂氏は妻が産後の肥立ち悪く、遂に生れて間のない愛兒を遺してあの世へ旅立つたそのお通夜の日に晴れの召集令狀を受取つた。出發に際し、「あゝ可憐なる我が兒よ、坊よお前は既に母を失ひ、今またこの父はお國の爲に應召して行く。この父が假令聖戰に仆れても、坊が大きくなつたら、お國の爲に忠義の二字を忘れずに御奉公をしてくれよ。」と恰も大楠公が其の子正行に櫻井の驛で、日本人としての大生命を諭したその如く、愛兒の名を忠一と附け、六十路の坂を越えた老父母に、生後一週間もたぬいとし子を委ねて、勇躍征途に上り、〇〇部隊に屬して上海敵前上陸を敢行、戰史に輝く吳淞砲臺攻略の大激戰に、天晴れ壯烈な戰死を遂げた。時に忠一君は生後一ヶ月まだ可愛い、頸も坐り兼ねる位の時であつた。

かくして悲しい月日の中に、譽の子忠一君は、早くも數へ年三つとなつた。忠一君の稀に見る成育の蔭には、おぢいさんの覺道さんが、六十三歳の老齡をも顧みず、昔乗つ

た覺えの杵柄を執つて大工職の生活戦線に立ち、おばあさんのつるさんがその育成に専念した涙ぐましい力闘がある。又町内の人たちが心を協はせて、この名譽の家、譽れの兒を無事に育てるべく、陰に陽に努力した力がこもつてゐるのである。

中には忠一君の成育に、足掛け三年の間、毎朝毎晩牛乳を贈り續けてゐる二軒の牛乳屋さんさへある。それは西區桃の木町平田庄一さんと、菊井町通の駒田繁一さんである。今後忠一君が乳を離れるまで無料でお届けして、日本一の桃太郎さんに仕上げるのだといつてゐる。あゝ、護國の勇士の遺子を協力して立派に育てること、これこそ眞に銃後美談中の美談といふべきであらう。

覺道さんは

「行末は立派な軍人に育て、戰死した父の遺志を繼がせてやりたいと思ひます。それまでは是が非でも生き延びて忠一の力になつてやります。戦場で仆れた伴も、きつと喜んでくれることと思ひます。」

と、老の目をしばたきつゝ語るのであつた。

三月六日六九、勇士の子供へ、お小遣やお守り

御國のために命を捨て、働いて下さる兵隊さんの残して行つた子供を護りませうと、感心な少女が感激の華を咲かせてゐる。

感激の少女は、昭和區船原町一ノ一二に住む煉瓦職京一氏の三女御劍尋常小學校三年の六組木村京子(一〇)さんである。擔任先生の談によれば、京子さんは組での優等生で支那事變が勃發するや、名譽の軍人として勇躍壯途についた同町神谷喜藏さんの妻女ともさんが、惠美(八ッ)ちゃん、幸正(六ッ)ちゃん、千恵子(三ッ)ちゃんの三人を抱へて淋しく暮してゐるのを見て、こゝぞ先生の教を實行する時と思ひ、親から戴く僅かな小遣錢を、自分には一錢も使はずに蓄へて、時折十錢二十錢を惠美子さんに與へてゐたのである。その上少しの暇でもあれば常に惠美子さんをいたはり仲よく遊んでやり、今では惠美子さんと二人で手にとつて幸正ちゃんと千恵子ちゃんのお守をしたり、ともさんの手助けをしてゐるとのことである。軍國少女の純情さ、聴くだけにゆかしいものがある。

ある。

七〇、真心一ばいの慰問袋

清野昭子さんは名古屋市中區西川端町二丁目二十二番地印刷業清野誠さんの長女、前津小學校の四年生で、非常に學業に熱心しかも快活な兒童である。

昭子さんは此の支那事變が起つてからは、両親からいたゞくお小遣を貯へそれで慰問袋をこしらへて屢々戦地の兵隊さんに送つた。そして彼の地から來る軍事郵便・繪葉書寫真等を眺めて心ひそかに喜んでゐるのであつた。

慰問袋や手紙を度々受けた岐阜縣土岐郡多治見町出身の古田貞一 一等兵は、百萬の敵も恐れぬ勇士であるが、昭子さんの真心こもつたおくり物や手紙に非常に感激し、「お父さんからよく御禮を言つて下さい。」と次の陣中だよりを郷里に送つた。

「昭子さんから昨年九月慰問袋を貰つてからずっと慰問のお便りをいたゞきました。

もう慰問袋は三度目です。しかも今まで自分が貰った中で一番立派なものでした。一面識もない昭子さんから、かくも親切を受ける私はたゞ／＼感泣のほかはありません。昭子さんを學校にたづねると、授業後の一時を元氣にお友達と運動してゐたが、汗ばんだ顔で

「私は兄弟がありませんので戦地に働いて居られる兵隊さんを兄さんだと思つて、お父さんやお母さんからいたゞいたゞお小遣が貯ると兵隊さんの好きさうなものを買つて送つただけです。古田さんからはいろ／＼な繪はがきや寫眞を澤山送つていたゞきましました。でもこゝしばらくお便りがありませんので、何か變つたことでもあつたのではないかと心配になつて、昨日の日曜日お母さんにおねだりして多治見に連れて行つていたゞきました。古田さんのお家は大きくてタイルや何か造つてみました、古田さんのお父さんやお母さんにもお目にかゝりました。古田さんは近頃お忙しいのださうです。やつと安心しました。これからも出来るだけ慰問を續けるつもりです。」と語つた。

七一、日本の妻敏子さん

級友は昭子さんを取り圍んで「昭子さんが新聞に出てゐるよ。」と自分のことのやうに喜んでゐた。筆者は「皆さん活きた御手本にまけないやうに。」と祈りながら校門を出た。

「二兒を失ひながらも健氣に家業を守る。」と、昨年八月二十五日の某新聞紙に載せられた軍國女性美談がある。名古屋市東區東新道町一ノ三小島稔さんの妻女敏子さんがこの佳話の主である。

支那事變が始まつてまだ間もない〇月〇〇日、早くも夫君稔氏は、北支派遣〇〇部隊上等兵として輝く出征の身となつた。

「どうか立派にお手がらを……。」と、武人の妻らしく夫の首途を笑顔で祝つたのであつたが、さて柱と頼む夫の留守に家業の事を考へると、はたと當惑しなければならぬ彼女であつた。祖母はつさん(六一)

を始めとして、長男正道(八つ)長女映子(二つ)次男孝道(五つ)三男晟道(三つ)の四兒を抱いては、如何に生活すべきかその術さへわからなかつたのである。然しながらさすが彼女も軍國の妻であつた。頭を並べた四人の子供の寢顔を眺めながら、ふと彼女の胸に浮んで來たのは夫の力強い頼みの言葉であつた。そして「私とても銃後の妻」と此の一語に固めた彼女の決意は、最早如何なる艱苦にも耐へ得る強さがあつた。先づ最初に當然給與されるべき軍事扶助類は一切之を辭退してしまつたのである。そして朝は未明から寢食を忘れて慣れぬ織手に針を持ち、男にさへ至難な洋服の仕立をする傍ら、一家の主婦として姑への孝養、子供の養育等、涙ぐましいばかりの努力がつくされたのであつた。

この健氣な決意、尊い精進に對して、世の運命はどこまでつれないことであらう。と言ふのは、やつと彼女の生活の方針が立てられた頃、三男晟道君が急に發熱したのであつた。夫の留守中に若しものがあつてはと、無我夢中の看護がつくされたけれども急性肺炎で折角の看護も力及ばず、あつてなく此の世を去つてしまつたのである。不幸

はそればかりでなく、まだ涙のかはかぬ一週間の後には、二男孝道君があとを追つて亡くなつてしまつた。僅か一週間の間に愛する二つのいとけなき魂を奪ひ去られた彼女は自らも後を追ひ度い程の悲しみの極にあつて何事も手につかなかつたが、尙この悲しみを夫に知らすべきか否かについて重なる苦しみがあつた。そして若し之を知らせたがために、折角御國に捧げた夫の士氣に影響する様なことがあつてはと、近親又は町内の人々に固く口止を願ふのであつた。常々から彼女の態度を賞讃してゐた人々は彌々感激を深うしさすが天晴れ勇士の妻よと讚嘆しないものはなかつた。

然しながら、折角の彼女の志も無になつた。知人の悔状によつてはしなくも夫は愛兒の死を知るに到つた。驚いた夫は早速報告を迫つたが彼女は少しも報告をしなかつた。その代り〇〇部隊長に細々と事情を報告して、返す／＼夫に對する激勵をのみ願つたのである。

剛勇無比の部隊長も涙なくしてこの手紙を読むことはできなかつた。そして部下である小島氏に對し、又留守を守るその妻女敏子さんに、情のこもつた慰めと激勵との言葉

を下したのである。

御國の爲めに銃をとる夫は言ふまでもなく、かくして守る銃後の妻敏子さんのふむみシンの音にも新しい興亞の調が勇ましく響く。

七二、奇縁が結ぶ戦線と銃後

南支戦線で活躍する皇軍勇士を感激せしめた、可憐な少女の銃後佳話がある。東區葵小學校六年に在學中の田沼いね子さん(東區赤萩町三丁目十七番地田沼眞一郎氏四女)の教室で綴つた皇軍勇士慰問作文は戦線に送られて圖らずも郷土の勇士河合二一さんの手に渡つた。これが縁となり、爾來繁々と慰問文を送つて居たが、いね子さんはそれで満足せず、河合さんの留守宅(東區横代官町)を捜し求めて、妻女君子さんを訪ひ、子供さんでもあつたならば子守でもと勵ます等、何呉れと無く慰め、今では親戚以上の愛と情とを以て往き來してゐる。銃後の少女として誠に純真な行といふべきである。尙、田

沼氏方でも子供心の無邪氣さに打たれて、河合さんの爲に何彼と骨を折り、一家擧げて出征遺家族への奉仕をしてゐるといふ事である。河合さんは、衷心からいね子さんの真情と厚意とに感激し、某新聞社まで感謝の書信を寄せた。

七三、親切な軍國家主さん

勇士の留守宅の借家を一年半も無料で貸してゐる奇特な家主へ戦線勇士から感謝一死報國を誓つてゐる二重美談がある。

昭和區車田町二ノ二四出身の〇〇部隊山邊秀之一等兵は、昨年〇月父の三喜藏氏のみを残して出征する事になつた。之を聞いたこの家主東區西魚町一田島安次郎氏は、率先家賃全額を免除してゐた。ところが本年一月病氣中の三喜藏さんが死亡した。もと／＼親一人子一人の事として、今は空家となつてしまつたのにかゝはらず、田島さんは「折角御國のために働いてゐて下さる勇士が、凱旋する家がなくてよいものか。」と、斷然その

儘山邊さんの表札を掲げてゐる。奇特な家主さんである。これを戦線で知つた山邊一等兵は大いに田島さんの情に感激し直に「必ず殊勳を樹て、この御恩に酬いる。」と誓つた手紙を寄せ、關係者をいたく感激させてゐる。

東區大曾根町片山神社々務所に、ある日一老婆が訪れ「息子が出征以來商賣の初金を

一日に三錢宛ためて、熱田神宮・招魂社・片山八幡社の三社に分けて持參しましたから神様に御供して下さい。」と一錢銅貨ばかりで五圓を差出し「廣東・漢口陷落萬歳、東大曾根町一露天商人の女」と云ふ書きつけばかりを添へて、氏名も告げず立去つた。

同社では諸方をしらべた結果、右の老婆は東區東大曾根本通り三服部正之勇士の母親である事がわかつた。三社の分をためるには約一年を要する譯であるから、同社ではこの赤誠こめた献金にいたく感激し、その意義ある使途を考究してゐると聞く。

七五、健氣な勇士の妻、坊が父うちやんの身代りよ

東區車道町三丁目一番地中條梅雄氏は、今次事變勃發間も無く榮ある召集に應じて出征さるゝや、妻女みよさん(一九)は臨月の身重で、人一倍父ちやん子の高光君(六)と留守を守ることになつたが、中條氏出征後程なく勝利君が生れた。主人の出征、赤ちやんの誕生、高光君の養育と、家業の薪炭商とに一時はひつくり返る様な騒ぎであつた。「勇士の家」と云ふので、町内が何も彼も世話をし、これに隣り近所の手厚い情けも加はつて銃後に咲く人情の花の美しさを見せた。

みよさんは實家(信州)から「女手一つぢややれるものではないから一先づ歸つて來い。」と云ふのを振り切つて「やれるなら出来るだけの事は一人でやれ。」と言つて行かれた夫君の言葉を胸にしめ、二兒を擁して活動を續け、女の身ながら仕入注文は勿論、遠くの配達にまで出歩き、よく一家を切り廻して來た。子供は近所の人達の親切な世話を受けて來たが、不幸にも高光君が生來の病弱から床に臥す様になり、病狀も思はしから

ず、兎角心を痛めてゐる中に、聰明で敏感な高光君は死の豫感でもあつたものか「坊が父ちやんの身代りになるから、きつと立派に手柄を樹てなさるよ。」など口走るに至つたそのうち體力頓に衰へて終に起たず、「アツ母ちやん父ちやんは家に居たよ。」と一言を遺して父の歸還の顔も見ず夭折してしまつたのである。何といぢらしい極ではないか。高光君の死を中條氏に知らせるべきか否かが問題になつたが、町總代の精園氏から○部隊長まで傳へ、その計らひに委すこととなつた。

程經て中條氏から相變らず元氣な便りがあつた。みよさんは依然、眞黒になつて働き続け「何から何まで皆様の御厄介になつてゐるから。」とて、勇士の歡送迎はもとより、毎月一日の熱田神宮參拜も必ず參加する等、全く町内でも「見上げた勇士の妻よ。」と賞讃の的になつて居る。因に中條氏は武勳赫々昨年○月目出度歸還、今や家業に精勵の由高光君の死も、本當に其のいたいけな言葉通り父の身代りを實現した事になつたのかも知れない。

七六、尊くも強き親心

大砲の音が地鳴りのやうに聞える午さがり、○○部隊成瀬隊長の許へ一通の飛行郵便が届いた。差出人は名古屋市東區長堀町二ノ五織田静子と達筆に書いてある。

前略—伴長正儀つねに御慈愛深き隊長様の御膝元にて勤務致居候由誠に結構この上なき光榮と一同喜び居り申候。何卒この上とも精々御鞭撻のほどよろしく御願ひ申上候。主人よりも一度御挨拶申すべ々筈の處近來非常に身體弱り殊に一昨日より意識不明危篤に陥り、近親など集ひ居候始末、甚だ失禮ながら私より御禮御挨拶申上候。主人は日頃より病状のことはいらぬ心配をかける故決して伴に知らすなと申しをり伴長正へは大切な御奉公中の折柄とて未だ通知差控へ居候。萬一落膽でも致し軍務あるそかに相成り候てはと心痛のあまり如何すべきものにやと思案の末隊長様まで右御含み賜はり度く願ひ申上候。

一氣に讀み終つた徐州戦の鬼隊長も、文面ににじみ出てゐる親心と銃後の愛國心とに

感激して、思はずほろりとした。目がしらをあつくして読み終つて成瀬隊長は直に長正一等兵を呼びよせ、父君の危篤を傳へたのち

「人の親としてのお母さんの胸中は察するに餘りある。しかし一旦召し出された以上、公事と私事とははつきり區別しなければならぬ。君に忠をつくすことはすなはち親に孝をつくす所以だ。」

と、かんでふくめるやうに忠孝一致をさとせば、謹嚴な態度で生きて居た長正君は

「はい、よくわかりました。自分が出征するとき父は別にいふ事はないが、「お前とはもう二度と會へないだらう。女々しい振舞をせず思ふ存分働いてくれ……」といひました。あの聲がまだ耳に遺つて響いてをります。恐らく父は今ごろ死んでゐるでせう。しかし父の死は覺悟の前です。今後とも一層軍務に精勵いたします。」

と涙で誓ひ、隊長以下並居る戦友を感激せしめた。

愛馬の手入れに忙しい長正君は語る

「學生時代には本當の意味の兩親の有難味はわかりませんでした。戦地に來てし

て、親は有難いものだといふことを感じました。戰場生活一年半の中に父からは一度の手紙も來ませんでした。それでも時々夢を見ます。忘れもしませんが昨年〇月〇〇日蕪湖で露營した時、病床の父が死んだ夢を見ました。自分が歎き悲しんでゐると死んだ祖母が夢枕にあらはれ

「お前がそんなに父の事を思つてゐるならもう一度父を蘇へらせてあげよう。」といつたとたんに、あの柔和な父の顔が大映しになつてあらはれたので「あつ、父だ。」と叫んで思はず抱き寄せたときハツと目がさめました。あれだけはつきりした夢を今までに見たことはありません。父が死んでも恐らく僕の所へは通知が來ないでせう。その代り父の靈は僕の魂の中によみがへり、今後の戦闘に千萬人と雖もわれ往かん……の氣魄を養ふこととせう。」

以上の美談が新聞紙上に發表された日、奇しくも織田長正一等兵の父辯護士織田了氏は永眠した。夫の危篤を秘して部隊長に前記の手紙を送つた静子夫人は健氣に語る。

「夫は今亡くなつたばかりですのに、どういふ奇縁でありませう。この日、長正が私

の手紙を部隊長様から読み聞かされ、父の危篤を知るとは。私は長正が御奉公中の身であればこそ父の病氣を飽くまで秘しておきたかつたのですが、これも肉親の情といひませうか、この間、部隊長様だけにお知らせしたのです。夫も草葉の蔭でわが子の武勳を祈つてゐてくれるであります。

七七、勇士の家へ日用品

事變勃發以來、名古屋市熱田區上旗屋町内の出征軍人遺家族の宅へ時々、現金・白米・薪炭・鶏卵などをそつとおいて行くかくれた義侠者があつた。遺族達が感激のあまり届出たので熱田區役所はじめ各種團體で其の人を探したところ、同町副總代鷺卵商鈴木喜代松さん(五四)と判つた。鈴木さんはかつて前線へ赴く勇士が熱田神宮へ故國を立つ祈願に、同町を通つて休憩した際「御苦勞様です。」と感謝し、鶏卵二十四貫目をぼんと差出して心から其の勞を犒つたなど、何かと機會のある毎に出征軍人遺家族のため、種々

面倒を見てゐたものである。

鈴木さんが「征く勇士に後顧の憂を残させてはならない。それには遺家族を護ることが第一です。又其れは銃後國民の義務ですから、私がほんの志だけのことをしたまでです。」と謙遜して語る中に、氏の熱誠がしのばれた。

七八、兵隊婆さん

「兵隊婆さん！兵隊婆さん！」と誰呼ぶともなく呼ばれる様になつた中川區荒子町の奥村よねさんと言ふ素封家の未亡人がある。事變以前も愛國婦人會の會員として多年献身的に盡力し、可成大きな功績をのこしてゐる。現在既に七十をとつくに越えた老軀をも厭はず、聯區分會長として、應召軍人の歡送迎には杖を便りに必ず名古屋驛までも出掛け、時には陸軍各所の病院を訪ねては心から白衣の勇士を慰めいたはるのである。又聯區内應召軍人の家へは一戸も餘さず丁寧に訪問し、一戸毎に一圓宛の鯉節を配布し、

特に負傷者の家には更に一圓宛を添へて贈るなど、朝起きるから夜床に入るまで、「兵隊さんのお爲に」と、あらゆる限りの手を盡くし、過日は師團へ梅干三樽を毛布五枚とを献納、銃後を護る諸團體には夫々進んで尠からぬ金品を寄附するのをなによりの楽しみとして居るのである。「私はこんな老ぼれたからであるから、とても若い方の様に銃後のお役に立つことは出来ない。だが精神だけは御國に命を捧げて働いてゐられる兵隊さんと同じ心意気です。」と元氣一ぱい。銃後を守る國民は老婆でもかくあるべしと言ひたい程の覺悟を示し、營々、實踐して行かれる姿は、聯區婦人はもとより學童達まで崇敬の的として居る。

七九、天晴れ寫真報國

勞苦もいとはず前線ではたらく勇士の爲、銃後の赤心をもちあげて、三百餘の出征家族を無料で撮影、戦地に贈り、寫真慰問を續けてゐる篤行の人がある。

熱田區東町夜寒五四蒲團商横井喜三郎さん(四六)が其の人で、自分の甥が昨秋〇〇部隊に應召し、輝く漢口攻略戦に参加した頃、留守宅を守る家族の寫真を撮影して戦地に贈り、大變喜ばれたことから、アマチュア寫真家の報國を期して、自家のウインドウに「出征勇士慰問の家族寫真は無料で撮影します。」の立札を掲げ、町内の出征家族から、霜を踏んで早朝熱田神宮に、武運長久祈願を日參する可愛い兒等の姿までカメラにおさめ、戦線の勇士に贈り、又護國の華と散つた勇士の宅には勇士の武勳を語る姿を引伸して區葬に法要に佛前を飾るために無料で贈つてきたもので、此の寫真報國の赤誠は到る處、感謝感激の的となつてゐる。

八〇、愛馬の鬣を腰に奮戦

中川區下之一色町字成亥島一〇番地犬飼吉三郎君は昭和〇〇年〇月〇〇日に名譽の應召を受け、勇躍輜重兵特務兵として北支の野に出征した。彼の勇猛果敢なる性は、〇

○部隊大行李の一員としてよくその任務を遂行し、尙其の間、北支地方官民の宣撫指導にも當つて、終始熱心に任務に服したので、嘗つては部隊長より賞状を授與されるの名誉を得た。

平素、自分の愛馬を勞はり、口ぐせの様に「この馬も陛下のお召に應じてこゝに出征し、御國の爲に働いてゐるのだ。どうして粗末になんか出来ようか。」と、まるで自分の子か妻かの如く可愛がつた。馬の手入れになると食事も忘れる程であつたのに、ふとした事からその馬が病氣になつて、とう／＼病死してしまつた。吉三郎君の悲しみは如何ばかりだつたらうか。彼は馬の鬣を切り取り「よく働いてくれた、戦友を失つて残念だ。だが、お前をいつまでも忘れずに連れて行くぞ、俺の立派に手柄を立てるのを見せてやらう。」とそれをしつかり腰につけて戦線に活躍してゐた。不幸はまた吉三郎君に襲つて來た。今年一月とう／＼吉三郎君も病魔に倒れてしまつたのである。軍隊のあらゆる治療も其の効なく、五月、遂に愛馬の鬣をしつかり握りしめつゝ名譽の戦病死者となつたのである。後に遺族の心からなるはからひによつて同君の遺骨と馬の鬣とを同所に埋め、

永く吉三郎君の靈を慰めることになつたといふ。永久に奏なふ愛馬行進曲の哀調ではある。

八一、六人の弟を戦線に送り自分は毎日日参團指導

「おぢさん、時間だよ。」

と子供等の黄色い聲が戶外でする。「もう時間かな。」と家業の多忙さに時を忘れてゐた高木俊明さんは「おいハルや、頼んだぞ後を。」と半纏をかなぐり捨て、国防服に身を固め、戦闘帽を頭に飛び出していく。漁師街にやうやく夜の帳が下りようとする頃である。

かうして毎日俊明さんは小さな子供等を世話し、雨の日も風の日も浅間社に皇軍將士武運長久の祈願に出掛けるのである。

俊明さんの家は酒屋で、かたはら天麩羅も賣る、特別夕方は忙しい。この店へコップ酒を傾けに來る町の常連が「この忙しいところを俊さんも偉いもんだ。」と言ふ聲を後にし

昭和十二年以來ずつと下之一色町南の切山下組日參團を育て、來たのである。私が日參團を世話するやうになつたのも、又現在世話してゐるのも、私の實弟四人と義弟二人、合せて六人の應召軍人をこの家から出してゐるからです。兄として弟等の武運長久を祈るのはあたりまへです。雨風にうたれながら、一日も缺かさず日參する幼い子等をみると、一人々々を抱いて行つてやりたい位です。」と献身的に銃後兒童のよき指導者となつてゐる。

八二、一家再興戦死の夫と二人分

熱田區旗屋町一八三番地に花かつを製造業とする石濱正海さんは一昨年〇月中支に出征し、老母みきさん(六五)長女裕子さん(三つ)を抱えた妻女久子さん(二四)は、「夫の留守に得意をへらしては申譯けがない。」と結婚の時、夫と誓つた「一家再興」の四字を胸に刻んで、夫が出征した其の日から毎夜自轉車の稽古を始め、夫と従兄の二人が廻つてゐ

た配達を女の身一つで切廻はして居る。夜十二時までには寢けづり、朝は必ず五時に起き、自轉車で駆け廻つて働き續けるので、近所に於ける評判的だつたが、夫の正海伍長は去る〇月〇日の夜、〇〇部隊に屬し、關帝廟の激戦で遂に壯烈な戦死をとげた。久子さんは「今は、夫の遺言を貫くのがたつた一つの望みだ。」と可愛い盛りの一入子裕子さんを、晝は同區玉の井の實家にあづけ、以前にまさる活動振りに、附近の人々は流石勇士の妻だけあると、等しく感歎の聲を放つてゐる。

八三、女主人を助けて咲かす銃後の華

近所の何處の家もまだ深い眠に陥つてゐる曉前から、もう店の掃除、米の運搬と、營々働き初めてゐる米屋さんがある。それは中川區八熊町柳島二女子の精米所早瀬松次郎さんの留守宅である。

事變が始まると間も無く、一家の柱石とたのみ松次郎さんは、名譽の應召を受け、妻

のいとさん及び四兒を残して勇躍戦線に向かった。歡呼の聲に夫を送り出したものゝ、さて女、子供で一家を切盛する淋しさ、心細さ、一時は將來を憂慮し困惑をせずにはゐられなかつた。しかし、生れつき勝氣ないとさんは、聖戦に苦勞する夫の身の上を思ふと、もうじつとしてはゐられない。「銃後の自分の氣が弱くては夫に濟まないばかりでなく、日本女性としての恥でもある。」とて敢然勇氣を奮ひ起し家業を女手でしつかり固く守つて、夫に心配をかけまいとの決意を固めた。

この特殊な覺悟を聞いた雇人、小澤明君、竹田喜登君、佐藤十雄君の三人は、いたく感動し、女主人いとさんに「どうか僕等三人にも働かさせて下さい。一生懸命一家協同して働けば決して家運を衰へさす様なことはありません。御主人が凱旋なさるまで、以前にも増して立派にこの家を盛り立てたいと考へます。」と力強く誓つた。其後は、雨の朝も風の夕も星をいたゞいて起き、露霜のむすぶ深夜まで、或は御用聞きに、或は配達にと、南は遠く築港、東は堀田方面までも飛び廻り、主人に代つて家業に精勵、たゞひたぶるに主家の繁榮を目ざして仕事にいそしんでゐる。「いとさんも偉いが、小僧さん達も

感心だ。」と見る者、聞く者感心しない者はない。夫の不在中いとさんは自分の母を失ひ、續いて姉を失つたが、三人の雇人の忠勤振に勵まされ、之を力と頼み、夫の晴れの凱旋の日までと家の内外の總てに精進してゐるのである。

八四、松葉杖に托して日參團

八五、戦況の激化する中

美談の主は中川區常磐尋常高等小學校の高等科第二學年に在學中の飯田輝雄君だ。輝雄君の家は中川區岩塚町字焙烙町にあつて、父の喜藏さんは貸自動車業を營んで居る。その五男の輝雄君には現在第一線にあつて御國の爲に活躍して居る三人の兄がある。こんな名譽な家に生れながら、悲しい哉。輝雄君は生れながらにして脚が不自由である。時も時、戦地の兄の事を思ふと歩行も儘ならぬ自分の身を歎いても歎き切れぬ悲しみである。或時は學校で先生から時局を説き聞かされ、或日は懐しい大陸の兄からの便りを讀み、もうじつとしては居られないやうな氣持にいらだつのであつた。不具者は不具者

としての御奉公の道はある。」と發心し、同町内の兒童を呼び集めて、岩塚町焙烙町少年少女日參團を結成した。昨年三月から今日に至るまで、風の日も雨の日も一日たりとも怠らず、多くの子供の世話をなし、不自由な我が身を松葉杖に托して附近の七所神社及び津島神社へ皇軍將士の武運長久祈願に餘念なく通ひ續けてゐる。その赤誠こもる姿こそ、同町民の誰もが涙なくしては眺められぬ感激であり、街の美しい話題ともなつてゐる。

八五、彈丸に死すとも病に死すな

〇〇部隊に屬し北支に活躍してゐた名古屋市熱田區傳馬町五出身の加藤茂伍長は、不幸病魔に襲はれて十月廿一日遂に陣歿したが、之より先、此の勇士の父、庄一郎氏は愛兒病むとの報に接するや、「戦死するとも病死はするな。」と病床にある愛兒を激勵する切々胸をうつ手紙を送つた。然し父の念願達せらず、勇士は遂に病歿したのである。やがて

此の手紙は部隊長によつて「これこそ祖國日本の銃後にある勇士の父の姿である。」と部隊全員に披露せられた。これを聞いた戦友達は、いづれも感涙のなかに士氣いよいよ壯なるものがあつたといふことである。あゝ、「彈丸に死すとも病に死すな。」皇軍將兵の剛勇無雙、此の父ありてこそ、此の言葉あつてこそ。

八六、戦線から頼む妹の入學

「誠に無様ですが妹のことに付、お願いがございます。家族の者がいくら高等科へ入學するやう奨めても、本人は嫌だといつて今某家の子守をして家へかへらない由、弟がらの手紙に大變驚き、誠に残念なことに存じます。留守宅は誠に貧家ではございますが、妹の高等科へ通學する位のお金は不肖私に戦地での俸給を貯めて送りますから、留守宅へお出かけ下さいまして先生から妹や家の者に、ぜひ入學するやうお奨め下さいませ。不肖私は無學のため現在戦地で何かにつけ非常に難儀致してゐます。これか

らの社會にはどうしても學力が無くてはと痛感してゐる次第です。よくこの事を御説明下さいまして入學の手續きをとるやうお話し程お願い申し上げます。(後略)

と妹の將來を思ふ切々の氣持を述べた手紙が、目下江南戦線で活躍中の〇〇部隊森甚吉一等兵から郷里中川區正色小學校長平野氏宛届けられた。

平野校長は痛く感激して直に甚吉さんの出身地中川區下之一色町中ノ切なる家を訪ね、父親銀次郎さんに相談の上、學校を嫌ふ妹そめ子さんに、この立派な手紙を見せ、よく説き聞かせたので、そめ子さんも翻然心をひるがへし、泣いて一同の前で勉學することを誓つた。

尙甚吉さんは同校の卒業生で、在學中は勿論、卒業後も家業を助ける餘暇に寸時も惜んで、勉強した近頃稀にみる模範青年で、青年學校でも優等生として他をリードしてゐた。

八七、生活戦線に闘ふ健氣な軍國女性

中川區下ノ一色町南の切新川提防内法雜貨商の小塚俊治郎さんは、事變勃發と同時に、

應召、〇〇部隊に屬して勇躍出征した。後に残された妻女ひでさんは十六を頭に七人の子供を抱へ、か弱い女手一つで、さゝやかな商賣を営まねばならなかつた。長女さきさん(十六)、長男安俊君(一五)、次女照子さん(一二)、三女つぎさん(一〇)、五女美智子さん(八つ)、六女姫子ちゃん(四つ)、それに俊治郎さん、出征後に生れた二男俊廣ちゃん(二つ)、合せて七人の子供の面倒をみながら働くのであるから、とてもひでさん一人では手が廻らないので、高等科通學中の長女さきさんを途中で退學させ、家事の手傳ひやら幼い弟妹の守りをさせることにした。だがまだ、手不足である。ひでさんの苦勞は並大抵ではない、商賣が統制にあつて仕入が叶はない。金物以外のわづかな雜貨を商賣して細々ながら生計をたてていく有様である。「俺のことは決して心配するな、澤山な子供を抱へて苦勞であらうが、どうか子供の養育を頼む。」と第一線で活躍中の夫からの便りを心にしめて、「戦地の夫に心配させては濟まない。やがてこの子供等も御國のお役にたてる大切な子だ。」と元氣一ばい、次から次へと来る苦難と闘ひつゞけてゐるのである。かくて激浪にもまれつゝ、生活戦線上を押切る健氣な軍國女性としてのひでさんの姿をみ

ては誰一人讃辭を送らぬ者はない。昭和十二年夏七月蘆溝橋の一銃聲が、東亞を覆うてゐた暗雲を破つた。老も若きも、官といはず民といはず、皇國の尊嚴を再認し、皇國の使命達成に邁進を開始した。ここに、名古屋市曹洞宗第四教區寺院十二ヶ寺と小川聯區町總代會とは、共同率先して市民教化に立つた。事變突發の七月、區内泰増寺を會場に、聖上御玉體の康寧、國威宣揚、戰勝祈禱、皇軍將士の武運長久の祈禱會を嚴修した。以來毎月泰増寺を會場として同祈禱會並に追弔會講演會を開催し今日に及んでゐる。

此の間第三師團管内の各部隊を始め、名古屋驛通過部隊や遺家族に砲彈除御守を献納し、その數二萬數千枚となつた。講演會講師も或は軍部より、或は大本山より然る可き方の派遣を受け、聽講者堂に滿つる有様で、教化成績亦言を俟たない有様である。次に

教區内寺院名を擧げておく。

- 中區東田町乾徳寺
- 東區宮出町永安寺
- 中區南小川町宋吉寺
- 中區東瓦町威音院
- 中區新榮町泰増寺
- 中區新榮町曹流寺
- 中區南小川町松徳院
- 昭和區竹田町源仲寺
- 中區新榮町照運寺
- 中區宮出町廣徳寺
- 中區南小川町正副寺
- 市外西枇杷島町昌光寺

八九、女子青年義勇隊の銃後活躍

事變勃發と共に、小碓女子青年團では時局に鑑み、女性の任務の重大性を自覺し「銃後は婦人で」を標語として百五十名の團員一致して、モンペを着用。女子義勇隊を組織して防空防護消火避難等の非常訓練を敢行し、殊に毎月一回第三師團司令部から加藤大佐を聘してその指導を受けるなど、標語の實踐に努力してゐる。

今其の活躍の二三を記せば

- 1、神社の清掃、戦死者の冥福、皇軍將士の武運長久祈願を續けてゐること。
 - 2、防寒用靴下を編み、皇軍慰問品とした事。
 - 3、彼岸團子など賣り、其の利益金で慰靈祭を行つたこと。
 - 4、ポロを賣つたり、勤勞に依つて得た金を献金したこと。
 - 5、梅干の献納を數回したこと。
 - 6、馬糧として草を刈り献納したこと。
 - 7、師團司令部へ藁の献納を三回したこと。
- 殊に女手に藁を献納するなど、その苦勞艱難は思ひ半に過ぐるものがある。
- 尙昨年九月小碓青年學校査閲に當り、女子義勇隊の査閲をも受け、軍國女性の面目を發揮した。同隊の結成は實に本市最初のもので、その後の活躍は認められ、或は師團司令部から、或は陸軍大臣からの感謝狀となつて、その面目を物語つてゐる。今や興亞建設、東亞の新秩序着々として成らうとする時、眞面目な義勇隊の活躍こそ刮目して待つべきものがある。

昭和十五年四月十八日印刷
昭和十五年四月廿三日發行

【戦線銃後美談集】第二輯

定價金五十錢

著者

名古屋市教育會

發行者

名古屋市西區御幸本町通八丁目十一番地
株式會社 星野書店

代表者 星野松次郎



印刷所

名古屋市中區千種町五反田五十二番地
合資會社 三益社

發行所

名古屋市西區御幸本町通八丁目十一番地
株式會社 星野書店

電話本局一三八四・一三八五番
振替 名古屋五八五番

戦線銃後美談集第一輯 定價金四十錢 送料金六錢 最寄書店品切の場合は直接申込を乞ふ

398
306

終

